

社会科における，資料を読み取り， 自分の考えをもつための指導の工夫

－社会科学習ハンドブックを活用した実践例－

社会科の学習では，子どもたちが様々な資料を読み取ったり，見学・調査活動をしたりしながら，学習の対象となる社会生活について考えることが大切である。

しかし，近年の諸調査の結果からは，資料から考えたり，考えたことをまとめて説明したりすることに課題があると指摘されている。

そこで，本研究では，子どもたちが資料を読み取って自分の考えをもつことができるようにするための手だての一つとして，社会科学習ハンドブックを開発した。そして，それを小学校第3学年の授業で活用する実践を通して，主体的に学習に取り組み，さらには自分の考えを表現できる子どもの姿をめざす中で，資料を読み取って自分の考えをもつための具体的な指導のあり方について提示した。

目 次

はじめに	1	第3章 授業実践での様子	
第1章 社会科学習の現状と これからの社会科学習		第1節 「京都市のまちの様子」での実践	
第1節 社会科学習における現状		(1) 授業の中の子どもたちの様子	16
(1) 諸調査の結果から	1	(2) 授業から見えてきたこと	19
(2) 学習指導要領改訂より	3	第2節 「商店のはたらき」での実践	
(3) 社会科の授業改善に向けて取り組まれて きたこと～先行研究より～	4	(1) 授業の中の子どもたちの様子	22
第2節 社会科学習に求められるもの		(2) 授業から見えてきたこと	28
(1) 資料活用能力を高める	5	第4章 研究の成果と課題	
(2) 言語活動の充実	5	第1節 研究の視点について	
(3) 問題解決的な学習の一層の充実	5	(1) 資料を読み取る能力の育成	31
第2章 自ら問題を追究するための方策		(2) 言語活動の充実	32
第1節 社会科学習をより充実させるために		(3) 問題解決的な学習の過程	33
(1) 資料を読み取る能力の育成	6	第2節 学習ハンドブックの可能性	
(2) 言語活動の充実	8	(1) 学習ハンドブックの効果	34
(3) 問題解決的な学習の過程	9	(2) より効果的に活用するために	34
第2節 学習ハンドブックを活用した 社会科学習		おわりに	34
(1) 学習ハンドブックを活用する意義	10		
(2) 学習ハンドブックの構成	11		

<研究担当> 小西 英生 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立朱雀第四小学校

<研究協力員> 西野 真里子 (京都市立朱雀第四小学校教諭)
 村瀬 宏一 (京都市立朱雀第四小学校教諭)

はじめに

以前担任している子どもから、「社会科は覚える教科だと思う。」という声を聞いたことがある。見学・調査や資料を活用するなどの活動が少ない社会科の学習からは、自分の考えをもって自ら問題を追究したり、わかることが楽しいと感じたりする子どもの姿を見ることはできない。社会科の学習では、子どもたちが様々な社会的事実・事象と出会い、見学・調査や資料を活用するなどの活動を自らが行い、学習の対象となる社会生活について考えることが大切である。それらの活動を数多く積み重ねることで、社会的なものの見方や考え方が育っていくのである。

しかし、近年の諸調査の結果からは、複数の資料を読み取ることや、自分の考えをまとめて説明することに課題があると指摘されている。これからの社会科の学習には、資料を読み取ったり調べたりしたことを関連づけて考察し、自分の考えを表現する力を育成することが求められている。

そこで本研究では、どのようにすれば子どもたちが自分の思いや考えをもって主体的に学習を進めることができるかということに焦点を当てた。自分の思いや考えをもち主体的に学習を進めるためには、資料を読み取る能力を育成すること、言語活動を充実させること、問題解決的な学習を充実させることの3点が重要であると考え、そのための手だての一つとして社会科学習ハンドブックを開発した。そして、地図、グラフ、写真などの各種資料を読み取るための視点や、調べ方やまとめ方の具体例を社会科学習ハンドブックに提示し、その中から子どもたちが自分で方法を選んで主体的に追究活動ができるようにしたいと考えた。

また、授業では自分の考えを書いたり話したりする活動を数多く取り入れ、自分の考えを深めていくことができる子どもたちの姿をめざした。そのような経験を積み重ねることで、社会的事象の意味や働きを多面的・多角的に考え、一人一人に社会的なものの見方や考え方を養うことができると考えたからである。

子どもたちが思いや考えをもち、自ら問題を追究するためにはどのような支援が必要なのか、本研究を通して明らかにしていきたい。また、社会科学習ハンドブックを開発・考察し、資料を読み取って自分の考えをもつための具体的な指導のあり方について提示し、どのような活用の仕方が有効なのかということについても述べていきたい。

第1章 社会科学習の現状と これからの社会科学習

第1節 社会科学習における現状

(1) 諸調査の結果から

3つの調査の結果を参考にしながら、社会科学習における現状について考える。

①OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) より

OECDが実施している生徒の学習到達度調査 (PISA) は、2000年、2003年、2006年と、3年ごとのサイクルで、15歳児を対象に行われている。内容は、「知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する」(1)ことを目的とし、『読解力』『数学的リテラシー』『科学的リテラシー』の分野にわたって出題されている。

本調査では、「読解力」を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」(2)と定義している。調査問題では、「物語」「解説」「記録」など、文章で表された「連続型テキスト」だけではなく、データを視覚的に表現した「図」「グラフ」「地図」などの「非連続型テキスト」を読み取る能力が求められる。

PISAは、小学生を対象とした社会科の調査問題ではないが、この調査で定義している「読解力」は、社会科の学習で求められる能力と重なる部分が多い。安野が「社会科で育てる学力と読解力は相互に深くかかわっている」(3)と述べているように、今後の社会科の学習を考える上でも着目したい点である。以下、「読解力」に限って結果を見ていく。

表1-1は、PISAの「読解力」の平均得点を表にまとめたものである。(4)

表1-1 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA)
「読解力」の平均得点

	日本	OECD平均
2000年調査	522点	500点
2003年調査	498点	494点
2006年調査	498点	492点

これを見ると、日本の2003年の結果が、前回より低下していることがわかる。この結果を受け、文部科学省は「読解力向上に関する指導資料 - PISA調査 (読解力) の結果分析と改善の方向 - 」

を出した。その中で、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次のような方向で改善の取組を行う必要があるとしている。

- ＜改善の具体的な方向＞(5) (下線は筆者)
- ① テキストを理解・評価しながら読む力を高めること。
 - ② テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること。
 - ③ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること。

以上のことを社会科の学習に置き換えて考えてみると、文章、図、表、グラフ、地図などの様々な資料を読み取ることや、読み取ったことを基にして、自分の考えを書いたり発表したりすることに重点をおいて学習を進める必要があるといえる。

②特定の課題に関する調査（社会）より

特定の課題に関する調査（社会）は、国立教育政策研究所が小学校第6学年と中学校第3学年を対象に実施したものである。「社会科における基礎・基本となる知識・概念及び問題解決的な学習の実現状況について調査を行う」(6)ことを目的としている。小学校の出題内容を見ると、以下のよう

- 基礎・基本となる知識・概念について
- ・主に都道府県の位置と名称、地図記号など。
 - ・歴史上の人物と業績、政治の働きなど。
- 問題解決的な学習について
- ・複数の資料から児童自ら学習問題を設定し、調べ、考え、判断し、自分の考えを表現すること。

また、これらの調査に合わせて、児童・生徒の社会の学習に対する意識や教員の社会科の指導の実際についての質問紙調査も行われた。

以下、調査結果から示された主な課題と指導改善の具体策を抜粋する。

- ＜調査結果における主な課題＞(7)
- 基礎・基本となる知識・概念について
- ・47都道府県の名称と位置の正答率は約55%である。
 - ・歴史上の人物と業績では、同時代の人物との誤答が多い。
- 問題解決的な学習について
- ・多様な資料の中から問題を発見・把握する力が不十分である。
 - ・課題の解決策を表現したり、その理由を説明したりすることが不十分である。

- ＜指導の改善の具体策＞(8) (下線は筆者)
- ・地図帳の継続的な使用、白地図作業など多様な学習活動の工夫。
 - ・人物年表や人物事典作りや、歴史的事象と結びつけた、人物理解を深める指導の工夫。
 - ・資料を読み取り、関係付ける活動を通して、子どもの問題意識を醸成させる指導の工夫。
 - ・調べた事実を基に考え、表現する学習機会の充実。

また、児童や教員を対象とした質問紙調査の結果からも合わせて、以下のようなことが考察されている。(9) (一部抜粋)

- ・47都道府県をまとめて覚えたり、白地図を使って学習したりした児童の正答率が高い傾向にある。
- ・授業において問題解決的な学習を行っている児童の正答率が高い傾向にある。

特定の課題に関する調査（社会）の結果から、特に注目したいのは、問題解決的な学習において、資料から問題を見出す力が十分ではないということである。なぜなら、子どもたちが地図、グラフ、写真などの資料から情報を読み取り、「なぜ～だろう。」「どのように～しているのだろう。」などの思いをもって、初めて「調べてみたい。」「確かめてみたい。」という意欲が出てくると考えるからである。また、地図帳の継続的な使用や学習したことを白地図にまとめるなど、多様な学習活動の工夫が求められていることについても注目したい。

さらに、自ら調べ、調べたことや考えたことを自らまとめるなど、子どもたちに学び方を身につけさせることも重要であると考え。

③平成19年度京都市学力定着調査より

京都市学力定着調査は、平成20年2月に本市教育委員会が教育研究会と共催して、小学校第3学年から第6学年までの児童を対象に実施したものである。「社会科の学習の状況を把握しようとする」(10)ことを目的としている。調査問題は、以下の3点に留意して作成されている。

- ＜問題作成（選択）の工夫＞(11)
- ・知識・理解や資料活用に関連するものが多いが、比較、分類、総合などの社会的事象に対する思考・判断についても評価できるような問題。
 - ・自分の考えを述べる、いわゆる記述式の問題。
 - ・問題文のなかに児童の作品や発言を登場させるなど、児童が親しみをもって取り組める問題。

調査結果を基に出された「学力定着調査」報告から、社会科の学力実態を見る。

表1-2は学年別の平均通過率と前回調査(平成19年2月調査)の通過率比較(12)である。

表1-2 学年別通過率と前回調査との通過率比較

実施学年	調査内容	平均通過率	前回調査
3年	3年生の履修内容	77.0%	71.5%
4年	4年生の履修内容	81.8%	78.6%
5年	5年生の履修内容	79.5%	78.4%
6年	6年生の履修内容	78.6%	75.1%

表1-2から、どの学年においても前回調査に比べ、平均通過率が高くなっていることがわかる。この結果について、「概ね満足できる結果であった」(13)としているが、考察では指導方法の工夫について、以下の点を指摘している。

<調査結果の考察より>(14)	
【第3学年】	
<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の定着をさらに確実にするための指導の充実。 ・因果関係に気付くことができる指導の充実。 	
【第4学年】	
<ul style="list-style-type: none"> ・地図に親しむための指導の工夫。 ・自らも社会の一員としての自覚を高めるための指導。 	
【第5学年】	
<ul style="list-style-type: none"> ・情報・統計資料などを効果的に活用する技能や能力を身に付けるための指導の充実。 ・学習内容から見たキーワードを大切にされた指導の充実。 	
【第6学年】	
<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的事実を正しく認識するための指導の充実。 ・社会事象の意味を考え、確かな判断をするための指導の充実。 	

それぞれの学年で指導方法の工夫について述べられているが、総じていえることは、「地図や地図帳の見方などの基礎的な知識・技能を身につけさせること」「資料から事実を読み取ること」「他の事象と比較・関連・総合して考えること」の3点であると考えられる。

これら3つの調査の結果では、資料を読み取ることや考えたことを表現すること、基礎的な知識・技能を身につけることなどの課題が指摘されていた。

では、これからの社会科の学習で、子どもたちにどのような力を育成していかなければならないのだろうか。学習指導要領の改訂より見ていく。

(2) 学習指導要領改訂より

平成20年3月28日に、文部科学省より新しい学習指導要領が公示された。本改訂は、中央教育審議会が出した答申を踏まえて行われたが、その中で示された改善の基本方針を挙げてみる。

<改善の基本方針>(15)

- ・社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する。
- ・地図や統計などの各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する。
- ・日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する。

この基本方針は、子どもたちが社会的事象の意味や働きを多面的・多角的に考えることや、社会的な見方や考え方を育てていくことを一層求めている。そのために、基礎的・基本的な知識・技能を習得することや、社会的事象の意味や関連を説明するなどの言語活動を重視している。その中で、国際社会で日本人としての自覚をもち、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決できる力を育成していくことが求められている。

また、各学年の目標についての大きな改訂はないが、それぞれの学年の「能力」に関する目標については、「これまでの『調べたこと』に『考えたこと』を加え、『考えたことを表現する』ことを一層重視した」(16)としている。

このことから、調べたことだけでなく、調べたことを基にして考え、考えたことを表現する活動がより一層求められていることがわかる。また、解説の中では、実際の授業について、「観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習、それらを比較・関連付け、総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など言語活動の充実を図ること」(17)を具体的に示している。子どもたちの学習活動が、調べたことを発表するだけにとどまらず、調べたことを基にして考え、自分の意見を述べたり友だちの発表を聞いたりして、考えたことを再構成するなど、他者とかかわりながら言語活動を充実したものにしていけることが求められている。

学習指導要領の改訂の経緯には、基礎的・基本的な知識・技能を活用して、直面する課題を解決していく力が十分ではないということが挙げられている。その力を育成するためには、社会科の学習で問題解決的な学習をより一層充実させ、調べたことを発表するだけでなく、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うなど、さらに言語活動の充実を図ることが求められていると考える。

諸調査の結果や学習指導要領の改訂から、社会科における現状や、子どもたちに育成すべき力について述べた。では、これから社会科の学習において、どのような授業改善の視点が必要なのだろうか。先行研究を踏まえながら検討していくことにする。

(3) 社会科の授業改善に向けて取り組まれてきたこと～先行研究より～

社会科の授業改善に向けて、これまでにどのようなことが取り組まれてきたのだろうか。いくつかの先行研究の成果を探ることにする。

前述した2003年、2006年のPISAの結果を受けて、「読解力」に視点を当てた研究が行われている。

吉永らは、社会科における「読解力」は、問題解決型の学習を基盤として育てることができるという視点に立ち、「読解力」の向上をめざした研究を行っている。その結果、学習過程をパターン化し、「課題解決に必要な資料を考える」段階を設定することにより、調査活動に見通しをもち、資料に対して主体的に向き合えるようになったことや、資料を読み取る際に視点を明確にすることにより、支援の必要な児童も主体的に学習に取り組むことができたと報告している。(18)

吉澤らは、読解力を育成する指導方法について、「読み考える力の育成」と「書く話す(表現する)力の育成」の2つの視点で研究を進めている。その結果、読み考える力を育成するには、資料の系統性を考えることや、読み解く際に「比較」の視点をもつこと、読み解く技能を育成する時間を十分に確保することが重要であると報告している。また、書く話す力を育成するには、様々な表現活動を取り入れ、書いたり話したりする時間を確保することが重要であると報告している。(19)

有馬は、観察・資料活用能力育成に関する内容を教科書分析表にまとめ、それらの能力育成のための教師用系統表を作成した。また、観察・資料活用能力習得のための児童用マニュアルを作成し授業で活用している。その結果、「資料の読み取り

方を繰り返し指導することで、観察・資料活用能力が育成できる」「マニュアルを用いて指導することは、学習の仕方を理解し、学習に活用させるだけでなく、主体的な学びの育成に有効であった」(20)と報告している。

このように、資料を読み取る能力を段階を踏んで育成することや、読み取ったことから考えを書いたり話したりする時間を設定することが重要であることが報告されている。

思考力・判断力に視点を当てた研究も行われている。多和田らは、資料提示・体験活動・子ども同士のかかわりあい工夫した「揺さぶる」活動を通して、比較・関連・具体化などの思考活動を行い、生きて働く知識を獲得させることをめざしている。授業での子どもの発言や記述から、「それまでに得た知識の中から根拠を探して関連付け、問いや学習問題に対して、より事実に近い答えを見いだそうとしている」「授業で学んだことが整理されて『知識』となり、後の思考活動の材料として用いられ、視点を広げるきっかけにもなっている」(21)と報告している。

澁谷は、「『思考力・判断力』は、(中略)必ず何らかの事象(知識)とかかわりながら育っていくもの」であるとし、知識の構造化、ウェビングの活用、集団思考をする場の設定などの手だてを授業に取り入れ実践した。その結果、「目標にかかわる知識をとらえきれなかった児童が、他の児童のウェビング内容について考えながら、その時間の目標にかかわる知識を獲得していくことができた」「集団思考をする場を設定したことは、考えを再構築させ、社会的事象をより深くとらえるための有効な手だてになった」(22)と報告している。

山下は、思考における言語の果たす役割に注目し、資料を言語化する活動を授業に取り入れ実践した。その結果、「多様な概念的知識の生産・獲得につながった」「社会的事象を総合的に概観することにつながった」(23)と報告している。

太田市教育研究所社会科班は、問題解決的な学習過程に、身近な地域資料を効果的に活用することで、社会的事象と自分の生活を関連づけてとらえる力を育成することをめざしている。その結果、「具体的な身近な地域資料としてビデオや写真などの視覚によるものによって興味関心が高まり、課題設定をすることができた」「個人活動やグループ(班)活動それぞれにおいて、発表や交流場面を設けることで、新たな発見や深まりが見られた」(24)と報告している。

このように、集団思考をする場を設定することや、資料を言語化する活動を取り入れることが、知識を獲得するために有効であるという報告がされている。

諸調査の結果や先行研究からは、これからの社会科学習を進める上で、いくつかの授業改善の視点が見えてきたのではないだろうか。

第2節 社会科学習に求められるもの

これまでの記述を踏まえ、社会科学習における授業改善の視点について述べる。

(1) 資料活用能力を高める

資料活用能力について、藤田は、「既存の資料を収集、選択、読み取り、分析、批判したり、自ら資料を作成、管理し、そのために必要な情報機器を活用する能力」(25)としている。また、特定の課題に関する調査(社会)の結果から、多様な資料の中から問題を発見することや、読み取った内容から考えることに課題があることが指摘されている。また、有馬の先行研究からは、資料を読み解く技能を育成することや資料から課題を設定することの重要性が報告されている。

資料活用能力とは、多様な資料の中から問題を見出す力や、問題解決のために必要な資料を収集したり読み取ったりする力であると考えられる。資料を読み取る力を育成するには、自分の知っていることや、既習事項、友だちの考えなどと比べて考えたり、複数の資料からどのようなことがいえるかを考えたりする活動が大切である。

このようなことから、社会科の授業の中で、資料は非常に大きな位置を占めているといえ、資料活用能力を高めることは、子どもたちの主体的な学習を支えることにつながるのである。

(2) 言語活動の充実

PISAの結果や、吉澤らの先行研究からも、自分の考えを書いたり話したりする活動が重視されている。今回の学習指導要領の解説にも「観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実」や「考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など言語活動の充実を図ること」(26)と具体的に示されている。調べたことを発表するだけでなく、調べたことから自分の考えをもち、自分の考えを話したり友だちの考えを聞いたりすることで、さらに考えが深まっていくのである。

具体的には、比較・関連付け・具体化・推論・分類などの思考活動を、文字や言葉などの言語を介して行うのである。思考と言語に密接な関係があることは、心理学的な側面からもこれまでの研究で明らかにされてきた。多和田らの先行研究においても、思考活動を行うことが視点を広げるきっかけになったことが報告されている。実際の授業場面で、多面的に考えたり公正に判断したりすることが、社会科の目標である公民的資質の基礎を養うことにつながると考える。そのような活動の経験を積むことで、社会的な見方や考え方が育っていくのである。

(3) 問題解決的な学習の一層の充実

問題解決的な学習を充実させることは、子どもの学ぶ意欲にも大きくかかわっていると考える。なぜならば、問題解決的な学習は、子ども自らが追究すべき問題を見つけ、体験的な学習や調査活動を通して、自らの問題を解決していく学習だからである。

藤井は、「『問題解決学習』の学習活動の『経験』を子どもたちに積み重ねさせてゆくことにより、子どもたちに『自ら学ぶ意欲と力』が育つのである」(27)と述べている。教師側の一方的な指導ではなく、子ども自らが「なぜだろう。」「どうなっているのだろう。」「知りたい。」「調べてみたい。」という思いをもってはじめて学ぶ意欲が生まれ、その意欲に支えられて主体的な学習が行われていくのである。特定の課題に関する調査(社会)の結果では、問題解決的な学習の実施状況については必ずしも十分ではないと指摘している。自ら問題をもち、自ら調べ考える学習を行っていくことがより一層求められる。

第2章では、これらのことを踏まえ、本研究で大切にしたい視点と研究の概要について述べていく。

- (1) 文部科学省『「読解力」の向上に関する指導資料』2005.12
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201.htm
- (2) 前掲(1)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/001.htm
- (3) 井上一郎・安野功・吉川成夫・日置光久・田村学編著『読解力向上をめざした授業づくり-国語・社会・理科・生活からの発信-中学年』2006.8 p.82
- (4) 文部科学省『OECD生徒の学習到達度調査(PISA)～2006年調査国際結果の要約～』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf

- (5) 前掲(1)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/005.htm
- (6) 国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査(社会)調査結果』2008.6 p.5
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_shakai/06002020000004000.pdf
- (7) 国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査(社会)結果のポイント』2008.6 p.4
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_shakai/06002020000007001.pdf
- (8) 前掲(7) p.4
- (9) 前掲(7) p.1
- (10) 京都市教育委員会『「学力定着調査」報告-小学校社会-』2008.6 p.7
- (11) 前掲(10) p.8
- (12) 前掲(10) p.2
- (13) 前掲(10) p.1
- (14) 前掲(10) p.10 p.27 p.51 p.73
- (15) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社 2008.6 p.3
- (16) 前掲(15) p.6
- (17) 前掲(15) p.5
- (18) 吉永鈴子ら「PISA型『読解力』向上を目指した指導の工夫に関する研究」『平成19年度研究紀要-第36集-』熊本県立教育センター 2008.1
- (19) 吉澤達也ら「社会科における読解力の育成」『読解力を育成する教科指導』埼玉県立総合教育センター2008.3 p.1
- (20) 有馬恭彦「社会科における児童の主体的な学びを支える観察・資料活用能力の育成」熊本県立教育センター 2008
<http://www.higo.ed.jp/edu-c/kokuryu/h19pdf/03.pdf>
- (21) 多和田律子ら社会科研究会「自ら考え判断できる子どもを育てる社会科学習」『研究紀要第21号』川崎市総合教育センター 2008.3
<http://www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou21/21-051-066.pdf> p.63
- (22) 澁谷隆行「社会的事象を多面的にとらえる力を高める社会科指導の工夫-関連付けて考える場を取り入れた指導を通して-」『研究紀要』青森県総合学校教育センター2008.3
http://www.edu-c.pref.aomori.jp/kenkyu/reports_data/d_ky07.pdf
- (23) 山下博典「資料を読み解き、自ら考えを深める子どもの育成をめざして」『平成18年度研究紀要』京都市総合教育センター 2006.3 p.30
- (24) 若林拓也ら社会科班「社会的事象と自分の生活を関連付けてとらえる力を育てる社会科指導の工夫-問題解決的な学習過程に身近な地域資料を効果的に活用して-」『研究紀要第47集』太田市教育研究所 2008.3 p.20
- (25) 藤田詠司「資料活用能力」『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書 2000.4 p.115
- (26) 前掲(15) p.5
- (27) 藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書 1996.3 p.2

第2章 自ら問題を追究するための方策

第1節 社会科学習をより充実させるために

(1) 資料を読み取る能力の育成

社会科の学習の対象は、社会生活のすべてであり、社会生活とは、人を中心とした、ものや自然とのつながりやかかわりである。社会科は、それらのすべてが学習の対象となる。

しかし、時間的・空間的制約などにより、子どもたちが社会生活のすべてについて、実際に足を運んで見学や観察をしたり、調査をしたりして学習することはできない。したがって、社会科の学習では、資料を通して間接的に社会生活について学習する場合がある。

藤田は、「資料はその現実を写し取ったもの」(28)と「社会の現実には直接知覚不可能なもののみなし、資料に表された記号を学習者が解釈する」(29)と述べ、社会と資料の関係に関する代表的立場は二つあるとしている。

大森も、「教材化のしかたによって、『学習することがらを立証する証拠となるデータ』としての資料になったり、あるいは『ワキ役として学習を助け効果をあげる役割を果たすもの』としての資料になったりする」(30)とし、資料を活用する学習は、社会科の学習で重要であると述べている。

いずれにせよ、社会科の学習で使用する資料は、社会生活を身近にとらえやすくするためのものであり、社会科の学習に資料は不可欠であると考えられる。

では、社会科の学習で使用する資料にはどのようなものがあるだろうか。京都市教育委員会が採用している教科書(31)に掲載されている主な資料には以下のものがある。

<第3学年及び第4学年>

・地図、絵地図、土地利用図、写真、絵、図、グラフ

<第5学年>

・地図、写真、絵、図、文章、グラフ

<第6学年>

・写真、絵、図、文章、年表、グラフ

各学年の教科書には、写真や絵など、画像から必要な情報を取り出す視覚型の資料が多く見られる。また、第3学年から第5学年にかけて「～さんの話」というように、働く人の声や文章資料として掲載されており、それらから働く人々の思いが読み取れるよう工夫されている。

このように、読み取る能力が必要とされる資料について、北は、「教科書に掲載されている資料が、写真やイラストなどの映像的なもの、実物資料などが多く、地図やグラフ、統計資料、文書資料などは全体的に減少の傾向にある」(32)としながらも、「個々の形態の資料の読み取りなど、具体的な方法や手続きを子どもの発達段階に応じて丹念に指導すること」(33)が大切であると述べている。

さらに中島は、写真資料の読み取りについて、「写真資料から『何を』・『どこまで』読み取らせるのかを明確にして指導することが重要」(34)であると述べている。

以上のことから、資料から学習の対象となる社会生活について、子どもたちがどれだけの事実を読み取れるかが、社会科の学習で大きなポイントになってくるといえるだろう。

例えば、1枚の写真を提示されたり、自分で調べて写真に出会ったりした場合、そこから何の情報も読み取れないのでは、その写真は子どもにとって無意味なものになってしまう。しかし、その写真から、自分で情報を取り出すことができると、その情報を基に自分が持っているイメージや知識、既習内容と比べたり、友だちと同じところや違うところなどを比べたりすることで、「なぜ」「どうして」「～なことがわかった。」などの思いがもてるのである。

資料を読み取るとは、資料から得られる情報を取り出すことである。そして、取り出した情報を基にして、社会的事実や事象の意味を理解するのが社会科の学習であると考えられる。社会科の学習をより充実させるためには、子どもたちが情報を取り出す力を育成していくことが大切なのである。

実際に、子どもたちは、社会科の学習で多くの資料と出会う。それは、問題解決的な学習の過程での「出会う」過程でも、また、「調べる」過程でも考えられる。資料だけでなく、社会生活全体も学習の対象となるので、見学・観察や調査活動をした場合でも、そこから多くの情報を取り出すことが求められる。こうした過程において、子どもたちが資料と出会ったとき、その資料から多くの情報を取り出せるようになることが大切である。

そのためには、指導者が、資料を読み取る視点を提示することが重要である。どんなことに注目して読み取ったらよいのか、「何を」「どのように」読み取ったらよいのかといった明確な視点を示し、その視点に沿って読み取っていくようにす

ることで、各種の資料から情報を数多く取り出せると考える。

さらに、必要な情報を取り出すだけでなく、複数の資料を比較したり関連づけたりしながら情報を取り出すことも、子どもたちが自ら学習を進める上で求められる力である。

以下の表は、平成20年3月に公示された学習指導要領解説社会科編の資料とその活用について、学年ごとにまとめたものである。

表2-1 学習指導要領に示されている資料とその活用
(読み取りに関する箇所はゴシック体)

	第3学年及び 第4学年	第5学年	第6学年
資料について	地図(絵地図を含む)や各種の具体的資料	地図や地球儀、統計などの各種の基礎資料	地図や地球儀、年表などの各種の基礎資料
活用について	<ul style="list-style-type: none"> 資料から必要な情報を読み取る。 資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料などから必要な情報を読み取る。 資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。 複数の資料を関連付けて読み取る。 必要な資料を収集したり選択したりする。 資料を整理したり再構成したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料などから必要な情報を読み取る。 資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。 複数の資料を関連付けて読み取る。 資料の特徴に応じて読み取る。 必要な資料を収集・選択したり吟味したりする。 資料を整理したり再構成したりする。

表2-1からは、資料から必要な情報を読み取ることはもちろんのこと、学年進行に伴って、読み取り方を系統的に高めていくようにすることが求められるのがわかる。

そのためには、取り出した情報を基に、自分の知っていることや経験したこと、既習事項などと比べたりつなげたりしながら、段階を踏んでより高度な読み取り方に発展させていくことができるようなステップが必要である。資料を読み取る視点に加えて、視点に沿って段階ごとに読み取っていくことができるような手だてが必要である。

例えば、グラフを見て、「増えている。」「減っている。」などと読み取ることから、「増えているのは前の時間に学習した～と関係があるのかもしれない。」「この減り方は～のグラフの減り方と似ている。」などと、既習事項や他の資料と関連づけながら読み取ることができるようになれば、より

広い視野での追究活動が可能であると考え。

そのような活動を繰り返すことで、社会的事実・事象と資料をつなげながら読み取ることができ、より広い視野で社会的事実・事象をとらえたり考えたりすることができるのである。

第1章第1節で述べたように、特定の課題に関する調査（社会）の結果でも、問題解決的な学習の過程において、資料から問題を見出す力が十分でないということが指摘されている。子どもたちにとって意外性のある資料を提示したり、考え方を揺さぶるような発問をしたりすることも重要なことであるが、子どもたちが、資料から多くの情報を取り出せるようになることも重要なことであると考え。資料から自分で追究したい問題を見出すことができれば、「調べてみよう。」「確かめてみよう。」という思いをもち、自ら問題を解決する過程で学習を進めることができるのである。したがって、資料を読み取る力を育成することは、問題解決的な学習を充実させることにもつながるのである。

（2）言語活動の充実

社会科の学習では、見学・観察・調査、資料の読み取りなどを通して社会生活を理解する。理解を深めるためには、見学・観察・調査をして、具体的に体験したことや、資料から読み取ったことを、言葉にして書いたり話したりすることが大切であると考え。

安野は、「貴重な体験を通じて感じ、考えたこと（具体）を自分の言葉に置き換えるなど言語化（抽象化）して脳裏に焼き付けておくように導くことが大切である」(35)と述べている。井上も「私たちは、(中略)五官をフルに働かせてさまざまなことを経験する。(中略)そのようにして得た経験を『知識』とし『学力』として身につけるためには、その経験を言語という形で表して意識しなければならない」(36)とし、経験を言語化することの重要性を述べている。また、北は、社会科における言語活動について「目的に応じて的確に記録すること、比較・関連・総合しながら再構成すること、さらに考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うこと」(37)と述べている。

つまり、見学・観察や調査をしたり資料から読み取ったりして得た情報を記録し、それを基にして考え、その考えを表現する一連の活動が言語活動であると考えることができる。

ピアジェは、小学校中学年頃（8～10歳）の児童

について、「直接的な行動の層で習得されたいろいろな論理は、それが子どもの中に定着し、形式的操作に耐えるようなものになるためには、児童自身によって言語の層で再学習されねばならない」(38)としている。

このようなことから、資料を読み取ったり見学・観察や調査したりしたことを、書いたり話し合ったりしながら自分の考えをつくり、そしてそれを表現することが社会科の学習を充実させる上で大切なことであり、社会生活の理解を深めるためにも欠かせない要素であると考え。

これまで、子どもたちが調べたことをそのまま書き写して発表していることに多くの指摘がされてきた。そのことは、今回の学習指導要領に「調べたこと」だけでなく「考えたこと」が加えられたことからもうかがえる。

これからの社会科の学習では、自分で調べたことや取り出した情報をそのままのみにするのではなく、自分の言葉にして書いたり、話したり、考えたりする活動がより一層必要となってくるのである。事実や事象を調べるだけに終わらず、調べたことから自分なりに考える活動を大切にしていきたい。

そのために、以下の2つのことが重要であると考え。

一つめは、**見学・観察・調査活動をする際や資料を読み取る際には、一つ一つの情報を文字にして丁寧に書き出したり、自分がもった思いや気づき、疑問などを書き表したりすること**である。文字にしてノートや付箋紙に書き表すことで、読み取った内容や自分の思いや考えなどが視覚化でき、それを基にして話したり、さらには考えを深めたりすることができるのである。

そのために、「何を」「どのように」書けばよいのかを、子どもたちが明確にわかるようにすることが大切である。「書きましょう。」「まとめましょう。」の指示だけではなく、量はどのくらい書くのか、どんな視点が必要なのか、構成はどうするのかなど、子どもたちが、書く目的や条件、内容を具体的にイメージできるようにすることが必要であると考え。また、まとめ方の具体例を提示し、その中から子どもたちが自分の追究する問題や興味・関心に応じて選び、自分でまとめることができるような支援も必要であると考え。

二つめは、**ノートや付箋紙に書いたことを基にして、話し合う活動を充実させること**である。子どもたち一人一人のものの見方や考え方は違うの

で、同じ体験をしたり同じ資料を読み取ったりしたとしても、子どもたちがもつ気づきや思いや考えは様々である。それらを確かなものにし、深めるためには、自分ももった気づきや思いや考えを話し合う活動が必要である。気づいたことや思ったこと、調べたことや考えたことなど、ノートや付箋紙に書かれた内容を、友だちとともに見たり動かしたりしながら話し合うことにより、「自分の考えと同じだ。」「～な考え方もあるのか。」「なるほど。」という思いをもつことができ、自分の気づきや思いや考えが広がり、深まっていくのである。

また、話し合う際には、友だちの話していることを最後までしっかりと聞くという姿勢が求められる。大切なのは、自分の思っていることや考えていることと比べて、同じところはないか、違うところはないかなどと考えながら聞くことである。たとえ自分の思いや考えと違っていても、まずは、相手の考えを受けとめて聞くことが大切である。そのような姿勢を育てることは、社会科の目標である公民的資質の基礎に挙げられている、自他を互いに尊重し合うことにつながるのではないかと考える。

このような活動を積み重ねることで、子どもたちのものの見方や考え方を広げることができると考える。そして、獲得した見方や考え方が、生きて働く知識や技能になり、その後の学習や生活の中で社会的事実・事象を見たり考えたりする際に役立つのである。

言語活動を充実させるためには、日常の学習活動の中で、自分の思いや考えを話す活動を位置づけることが必要だと考える。そして、考える→書く→話すというように、常に自分の思いや考えを表出させる活動を、子どもたちにも意識できるようにすることが必要だと考える。また、「話し合いましょう。」という指導者の指示を待つのではなく、自分の思いや考えを周りの友だちと話し合いながら自分たちで学習を進めていくことができるように、具体的な活動の内容を示していくことも重要なことであると考えられる。

(3) 問題解決的な学習の過程

問題解決的な学習の定義について、まず、学習指導要領や先行研究を参考にしながら、必要な要素をまとめることにする。

平成11年「小学校学習指導要領解説社会編」は、「問題解決的な学習など、児童の主体的な学習を一層重視することが大切である」(39)と記し、児

童の主体的な学習を重要視している。

谷川は「問題解決学習とは、子どもが直面している問題を解決することを通じて、子どもたち自身が自らの経験や知識を再構成して発展させようとする学習である」(40)と述べている。

藤井は「問題解決学習とは、子どもの心理的な発達の系統に基づいて、子どもたちがものごとを自力で、知的にやり遂げていくための能力・態度・意欲を成長させることを目的とする学習活動である」(41)とし、具体的な学習活動について「子どもたちが自分たちで社会生活についての事実を調べ、情報を収集し、その意味について考え合い(話し合い)、どうあればよいのか、(中略)自分なりの意思決定をすることがなされる」(42)と述べている。

これらの文献の記述から、問題解決的な学習を進めるにあたって、必要な要素を以下のように考えることができる。

- ①子ども自身が解決すべき「問題」をもっていること。
- ②「問題」の解決に向けて、子どもの主体的な活動が行われること。
- ③「問題」を解決する際に、「思考する」活動を伴うこと。

文献の記述では、「問題解決学習」や「問題解決的な学習」とあるが、ここでは、詳細な違いには触れず、子どもが学習の主体であるという視点から、本論では総称して「問題解決的な学習」と呼ぶことにする。

次に、社会科での問題解決的な学習の過程は、どのように位置づけられているのだろうか。京都市教育委員会が作成している小学校指導計画(社会科)(43)を見ることにする。

小学校指導計画(社会科)では、学習過程を「つかむ」「調べる」「まとめる」を基本型とし、これに、「出会う」「表す」「生かす」なども加え、学習活動の特色に見合った過程が工夫されている。各学年においては、概ね「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」という過程で単元が構成されていることがわかる。

すべての問題解決的な学習を、このような過程に当てはめることはできないが、これを1つの例として、それぞれの過程での学習活動を、次頁の表2-2にまとめた。

このような問題解決的な学習の過程に沿った指導計画を作成し、子どもたちに問題解決的な学習の経験を積ませることが重要である。

表2-2 問題解決的な学習の過程（小学校指導計画社会科より）

問題解決的な学習の過程	学習活動
出会う	社会的事実や事象と出会い，子どもたちが気づきや思い，驚きや疑問をもつ。
つかむ	自分が追究する学習問題をつくり，予想や調べる計画を立てる。
調べる	学習問題を解決するための資料を集めたり，見学や調査などの活動を行ったりする。
まとめる	調べたことを基にして考えたり，学習問題に対する自分なりの答えを導き出したりする。

しかし，社会科学習の現状を考えると，先の特定の課題に関する調査の結果からは，問題解決的な学習の実施状況が必ずしも十分ではないということが指摘されていた。子ども一人一人の能力や技能，ものの見方や考え方の違いに対応するために，個に応じた指導・支援がさらに求められていることがうかがえる。

問題解決的な学習の過程で社会科の授業を進めていくことが重要であることは言うまでもないが，問題解決的な学習をより充実させるためには，上の表に示しているように，子どもたちが学習の流れを意識できるようにすることが重要だと考える。言い換えれば，問題解決的な学習の過程での学習の仕方を，子どもたちに身につけさせるようにすることが大切なのである。

表2-2に示したように，「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」のような流れで学習するという見通しをもつことができれば，問題意識をもって社会的事実や事象と出会い，自分もった問題を，資料を集めたり見学や調査をしたりして追究することができる。角屋も「意欲の現れている子どもは，何をすべきか，（中略）どのようにすべきか，（中略）目標を実現する方法あるいは問題を解決する方法が明確になっている」(44)と述べている。

つまり，一人一人の子どもたちに，問題解決的な学習を進める上での必要な能力や技能を身につけさせるには，まず，何をどのような方法で調べたらよいか，どのような道筋で学習を進めていけばよいか，具体的にわかるようにすることが必要なのである。特に，社会科を初めて学習す

る小学校第3学年の児童にとっては，「どのように資料を見たらよいか」「何を調べたらよいか」「どのように調べたらよいか」「どのようにまとめたらよいか」など，問題解決的な学習の過程に沿って具体例を示すことが必要である。そして，その具体例を参考にすることで，何をどのように学習していくのかという見通しをもつことができ，主体的に学習を進めることができる。そして，そのような学習の経験を積み重ねることで，子どもたちに学習の仕方が身についていくのである。

以上のように考えると，社会科の学習を充実させるためには，まず，見学・観察・調査をしたり資料を読み取ったりして一つ一つの情報を丁寧に取り出す活動が重要なのである。

そして，それらの活動を充実させるとともに，取り出した内容を書いたり話し合ったりすることで，「どうしてだろう。」「多分～なっているに違いない。」「くわしく調べてみよう。」という思いをもつことができ，その思いが自ら問題を解決していく学習活動へとつき動かしていくのである。

第2節では，これらの活動を充実させ，子どもが主体的に学習を進めるための手だてについて詳しく述べる。

第2節 学習ハンドブックを活用した社会科学習

（1）学習ハンドブックを活用する意義

社会科の学習の対象は，人を中心とした，ものや自然とのつながりやかかわりであり，すべてを直接見ることはできにくいということは先にも述べた。そのため，社会科の学習が始まる小学校第3学年の子どもたちの中には，社会科でどのような内容を学習するのか，どのように学習を進めていくのか，具体的なイメージをもつことができにくい児童も存在するのではないだろうか。学習が進んでいくにつれて「社会科が苦手だ。」という思いをもつ子どもが，以前担任していた子どもたちの中にいたことを思い出す。

そのような子どもたちが，どのように社会科の学習を進めていったらよいか分かるように，さらには自分の思いや考えをもって学習が進められるようにするために，学習ハンドブックを開発した。

学習ハンドブックを活用することで，子どもたちが見通しをもって自ら社会科の学習を進めることができる。ただし，それはすべての子

どもが活用する必要はなく、それぞれの子どもの実態に合った活用の仕方があると考え。最終の目標は、すべての子どもたちが学習ハンドブックを活用しなくても、自ら問題を見つけ、自ら問題を追究し、社会科の学習を進められる力をつけることである。

しかし、教室の子ども一人一人を見たときに、すべての子どもがそうであるとは限らない。社会科の学習の進め方がわからなかったり、資料をどう読み取ってよいかわからなかったりする子どももいるのではないだろうか。

そのような子どもたちが学習ハンドブックを活用することで、学習の進め方がわかったり、資料を読み取ったりすることができるようにしたいと考えた。また、自分で問題を追究できる子どもにも、学習ハンドブックの具体例を基にして、さらに多様な方法で追究活動ができるようにしたいと考えた。

困ったときや、どのような方法で学習するのか振り返るときに活用するなど、一人一人の子どもに、学習ハンドブックがヒントになったり、方向づけになったりするのである。つまり、学習ハンドブックを活用して学習することで、自ずと問題解決的な学習の進め方が身につけられるのではないかと考えた。

問題そのものについてどのようにとらえるかは、これまでに多くの研究者等によって「子どもの直面する切実な問題」や「社会的問題」など、様々な定義がなされてきた。しかし、問題というのは、私見ではあるが、子どもたちがもった疑問や自分が知らないことについて、「知りたい。」「調べてみたい。」と思うことそれ自体が問題になるのではないかと考える。

子どもたちだけでなく、私たち大人も、疑問をもったり自分の知らないことがあったりすると、自分で調べたり人に聞いたりしながら解決しようとする。それでも解決できなかったり、さらに新しい疑問や知らないことが出てきたりすると、また違った方法で調べたり聞いたりして解決しようとする。「知りたい。」「調べてみたい。」という思いが、学習を進めていく原動力になるのである。

問題解決的な学習は、子ども自身が解決すべき問題を持ち、その問題の解決に向けて自ら調べたり考えたりまとめたりする学習である。つまり、学習ハンドブックを活用しながら、自ら問題を解決していくことは、自ら学ぶ力を育成することにつながると思われる。

図2-1は、授業で想定される子どもの姿を4つの段階に分け、学習ハンドブックがそれぞれの子どもたちにどの程度活用できるかをイメージしたものである。

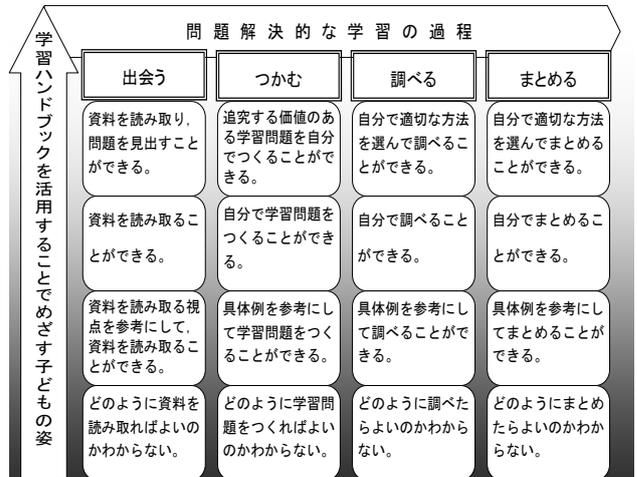


図2-1 学習ハンドブックを活用することでめざす子どもの姿

図2-1の横軸は、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」の問題解決的な学習の過程である。学習ハンドブックは、問題解決的な学習の過程に沿って構成されているので、それを活用することは、子どもが主体的に学習を進めるための手だての一つとなるのである。

そして、縦軸は、授業で想定される子どもの姿を4つの段階に分けたものである。背景の色が濃いほど、学習ハンドブックの活用や個別の支援を必要とする児童の姿である。背景の色が薄くなるほど、自ら問題を追究する子どもの姿に近づいていくのである。

このように、今の段階よりもさらに自分で問題を追究する力が育つように、学習ハンドブックを活用したいと考えた。

(2) 学習ハンドブックの構成

京都市教育委員会が作成している小学校指導計画社会科では、問題解決的な学習の過程を、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」としている。学習ハンドブックは、学習を進めるためのヒントや具体例を示したものであると同時に、問題解決的な学習の進め方を身につけることができるようにしたものである。

【「出会う」過程】

「出会う」過程では、子どもたちが資料を読み取って、多くの気づきや思いや疑問などをもち、資料から自分が追究する問題を見出せるようにし

たいと考えた。

そこで、学習ハンドブックに資料を読み取る視点を提示することで、子どもたちが資料から多くの気づきや思いや考えをもつことができるのではないかと考えた。そして、その視点を基に、資料を読み取る活動を積み重ねることで、読み取る能力が育成できると考えた。具体的には、資料を読み取るための視点を4つのステップに分け、表2-3のように示した。

表2-3 資料読み取りの視点

①	見たまま、感じたまま		
②	人	もの	自然
	人の数 服装 動きや仕事 表情 声 気持ち 工夫 苦労	色 形 大きさ 数や量 文字や数字	季節 天気の様子 太陽の位置 山、海、川、湖などの様子
③	比べて		
④	関係づけて		

まずは、資料を直感的に見たり概観したりし、次に、人・もの・自然などを視点にそって丁寧に読み取っていく。続いて、自分が体験したことや経験したこと、既習事項などと比べるのである。そして、最後に、「～なのは、～からだと思う。」というように、事実・事象と自分の考えをつなげて読み取っていくのである。このように段階を経て資料を読み取っていくようにすることで、読み取ったことや自分の考えが次第に深まっていくと考えた。

しかし、これだけでは、資料から必要な情報を十分に読み取ることが出来ない。第2章第1節でも述べたが、社会科には、地図、写真、絵、図、グラフなど多種多様な資料があり、それぞれの資料の特徴に合わせた読み取り方を提示することが必要になってくる。

例えば、地図であれば方位や地図記号、グラフであれば具体的な数値やその増減など、読み取れる内容は資料ごとに異なっている場合が多い。そこで、表2-3の視点を基にして、学習ハンドブックに、具体的にそれぞれの資料を読み取る視点を示した。

図2-2は、学習ハンドブックに示した写真を読み取る際の視点をまとめたものである。写真からどのような情報を取り出せばよいのか、指導者が注

①見よう	・ 何が見えるかな？ ・ 全体てきな印しようは？	思ったことや感じたことを書いてみよう。
②注目しよう	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人の数 ・ 服そう ・ 動きや仕事 ・ 表じょう ・ くふうやくろう </div> <div style="width: 45%;"> <p>もの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 色 ・ 形 ・ 大きさ ・ 数や量 ・ 文字 </div> </div> <p>自然</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ きせつ ・ 天気の様子 ・ 山、海、川、湖などの様子 	たくさん見つけて書いてみよう。
③くらべよう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の知っていることとくらべてみよう。 ・ 友だちが見つけたこととくらべてみよう。 	自分が知っていることとくらべて書いてみよう。 友だちと同じところや、ちがうところを見つけてみよう。
④つなげよう	<ul style="list-style-type: none"> ・ つなげて考えよう。 ・ 予想してみよう。 (～なのは、たぶん～だからだと思ふよ。) 	友だちの考えや、自分が知っていることとつなげて考えてみよう。

図2-2 提示資料：資料を読み取る際の視点

目させたい点を具体的に示すことで、より詳細に写真を見ることができるようである。そして、写真から取り出した情報を、自分の知っていることや友だちが取り出した情報と比べる。そうすることで、自分の写真の見方が広がり、さらに深い読み取りができると考えた。「出会う」過程では、このような視点に沿って、資料を読み取る活動をするのである。

そして、その活動を繰り返し行うことで、どのように資料を読み取ればよいのかわからなかった児童も、資料を自分で読み取ることができ、最終的には資料から問題を見出すことができるようになると考えた。

【「つかむ」過程】

「つかむ」過程では、「出会う」過程で読み取ったことを基にして、子どもたちが学習問題をつくり、予想や追究活動の見通しをもてるようにしたいと考えた。そのために、まず、視点から読み取った内容を、書いたり話したり聞いたりする活動を通して、「なぜ」「どうして」などの思いを醸成し、自分が追究する問題をもてるようにすることが大切だと考えた。

そこで、表2-4のような学習問題の文型を学習ハンドブックに提示し、資料を読み取ることによってもった思いや気づき、疑問などを基にして自分の学習問題をつくれるようにした。

表2-4 学習問題の文型

様子や仕組みについて 知りたいとき	どのようになっているのだろう。 どんな～だろう。 どんな～をしているのだろう。 どのくらい～しているのだろう。 どんな工夫をしているのだろう。
わけや理由が 知りたいとき	どうして～だろう。 なぜ～だろう。

例えば、製造工場の様子を写した1枚の写真を視点に沿って読み取っていくと、「材料や品物がたくさんある。」「いろいろなところで機械が使われている。」「品物を検査している人がいる。」など、多くの情報を取り出すことができる。その後、取り出した内容を友だちと話し合うことで、自分と同じところや違うところを見つけることができ、自分が取り出した内容をさらに深めたり広げたりすることができるのである。

そして、図2-3に示しているような流れで、自分が疑問に思っていることやさらに詳しく知りたいことなどを、学習問題の文型にあてはめる。

すると、「どれくらいの材料があるのだろう。」

「一日にどれくらいの製品が作られているのだろう。」「なぜ機械がいろいろなところに使われているのだろう。」となり、自分がどのような内容を追究していくのか、見通しがもてるのである。さらに、自分であてはめた内容を、「調べてすぐにわかることや、調べてもわからないものなどに分けよう。」や「予想してみよう。」など、視点に沿って友だちと話し合うことで、より追究する価値のある学習問題をつくれるようになるのである。

このような方法で学習問題をつくるのが、必ずしもすべての単元において有効であるとは限らない。しかし、自分で学習問題をつくり、追究の見通しがもてるようになるのと、問題解決的な学習を進めることができるのではないかと考えた。

そして、このような一連の流れを、子どもたちが具体的にイメージできるようにするために、図2-4のような具体例を学習ハンドブックに示した。具体例には、学習問題に対しての予想をしたり、複数の方法で調べたりすることをうながすような文言を書き入れた。それを活用しながら学習することで、学習問題を追究する活動の見通しがもてるようになると考えた。

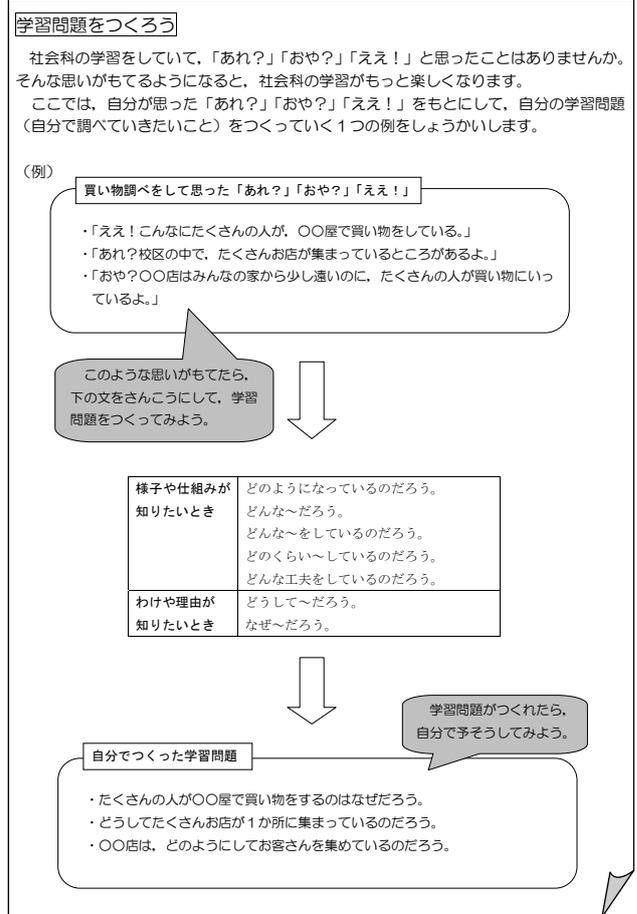


図2-3 提示資料：学習問題の文型にあてはめる具体例

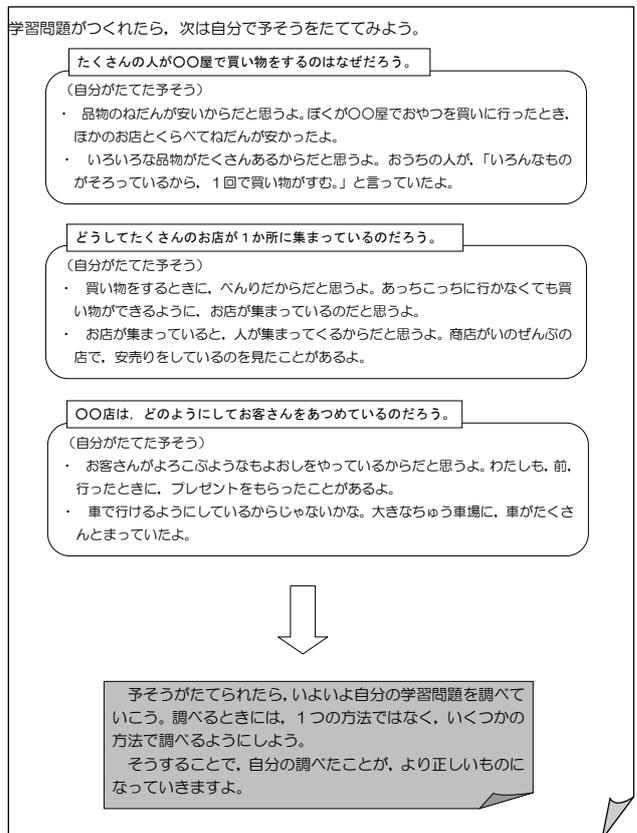


図2-4 提示資料：追究活動へ移る流れを示した具体例

【「調べる」過程】

「調べる」過程では、子どもたちが学習問題を解決するための資料を収集し、見学や調査などの活動ができるようにしたいと考えた。

そのためには、まず、複数の方法を提示し、その中から選択して追究活動ができるようにした。

まち探検の仕方、方位磁針の使い方、インタビューの仕方、図書資料での調べ方、地図の見方、見学の仕方、調査の仕方、手紙の書き方、電話のかけ方、インターネット検索の仕方

上に示したものは、小学校第3学年で習得させたいと考える主な調べ方の技能である。問題を追究するためには、複数の方法があることを知り、その中から方法を選んで、必要な資料を収集できるようにしたいと考えた。問題を解決するための資料をすぐに見つけることができなかつたとしても、複数の方法を知っておくことで、そこから違う方法を選び、再び追究活動をすることができるのである。また、すぐに問題を解決する資料が見つかったとしても、違う方法で確かめることで、多面的な追究ができるのである。

次に、各種の調べ方の手順を、学習ハンドブックの具体例に詳しく示した。どのように調べたらよいかのわからない児童は、調べる方法の具体例を見ることで調べる手順がわかり、自分で調べることができるのである。

さらに、調べ活動をする際の配慮事項を学習ハンドブックの具体例に書き入れた。実際には、児童がつまずきそうな場面を想定し、調べる際に大切なポイントとして示している。例えば、図2-5の方位磁針の使い方の具体例では、文字盤の北と色がついている針とを合わせることや、方角の向きの合わせ方を示した。また、図2-6の手紙で調べる具体例では、相手にわかりやすく書くための例などを示した。これらのポイントを示しておくことで、学習ハンドブックの具体例を参考にしながら調べられる児童は、それほど指導者の支援を必要としなくなると考えられる。その分、指導者は支援が必要な児童に重点的にかかわることができるのである。

このように、子どもたちが複数の方法で資料を集められるようにしたいと考える。そして、様々な方法で集めた資料と自分の問題とを照らし合わせ、どの資料が必要なのか選択するような機会を設定することで、資料活用能力を高めていきたいと考える。

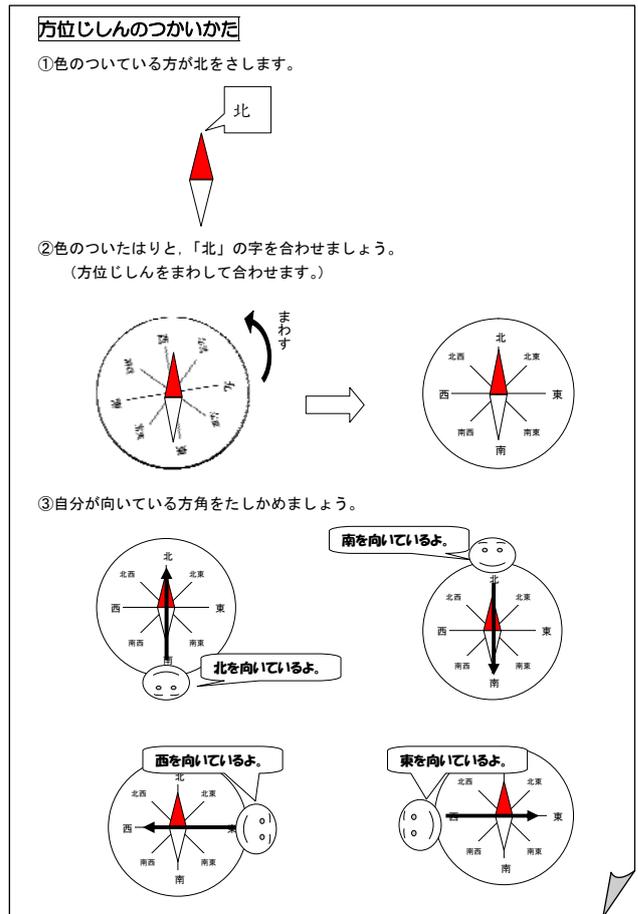


図2-5 提示資料：方位磁針の使い方の具体例

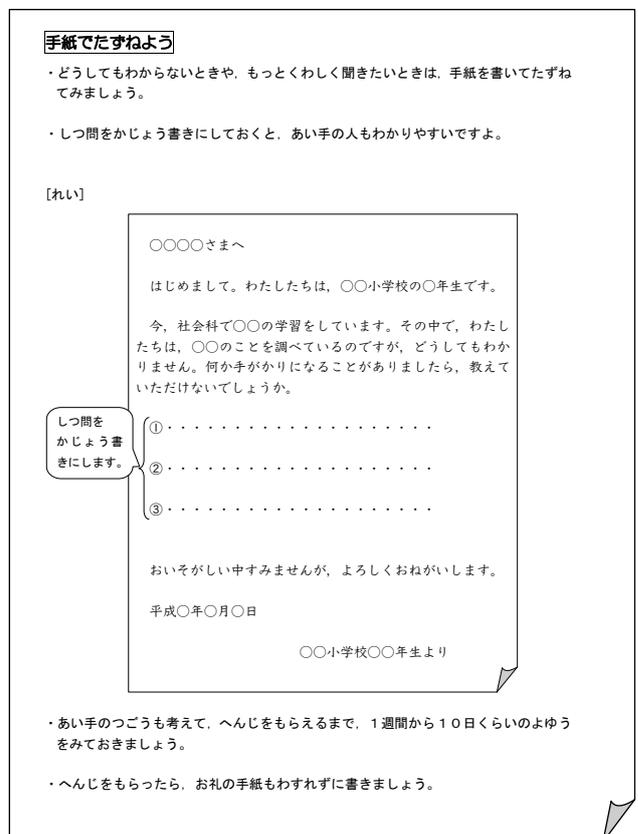


図2-6 提示資料：手紙で調べる具体例

【「まとめる」過程】

自分の意見や考えをまとめてかくことの重要性は、前述したPISAの結果からも指摘されている。「まとめる」過程では、子どもたちが調べたことや考えたことをかきまとめられるようにしたいと考えた。さらに、調べたことや考えたことを友だちと話し合いながら、自分で学習問題を解決する姿をめざした。そのために、まず、以下のように複数の方法を提示し、その中から自分の興味や関心、学習問題に応じて選べるようにした。

白地図、グラフ、表、新聞、ポスター、ペープサート、紙芝居、パンフレット

また、自分で調べたことや考えたことをかきまとめるためには、どのようにしてまとめたらよいか、どのようなことをかいたらよいか子どもにイメージできていないと、かくことが難しいのではないかと考える。

そこで、それぞれの方法のまとめ方の手順を、図2-7のように、学習ハンドブックの具体例に詳しく示し、その具体例を参考にしながらかきまとめることができるようにした。どのようにまとめたらよいかかわからない児童は、まとめ方の具体例を見ることで手順がわかり、自分でまとめることができるのである。そして、自分が書いたことを基にして発表することで、表現活動がより充実できると考えた。

さらに、学習ハンドブックのまとめる具体例の中に、「自分の考えや思ったことを書き入れよう。」や「友だちに見てもらって感想を言ってもらおう。」などの文言を示すことで、子どもたちが自分の考えを書いたり話したりしながら、自ら学習を進められるようにした。自分の考えを話したり、友だちの考えを自分の考えと比べて聞いたりすることで、学習問題の解決に向けて多面的に考えることができるのである。

具体例を示すことで、学習の進め方の見通しがもちにくい児童にとっては、それを参考にしながら学習を進められ、また、自分で学習を進められる児童にとっては、具体例を足がかりにして、さらに発展させて自分の方法で学習を進めることができるのである。つまり、学習ハンドブックを基にして、自分で学習を進めるための方法を獲得できると考える。

第3章では、授業の中で学習ハンドブックを活用した実践について、子どもの具体的な姿を通して述べていく。

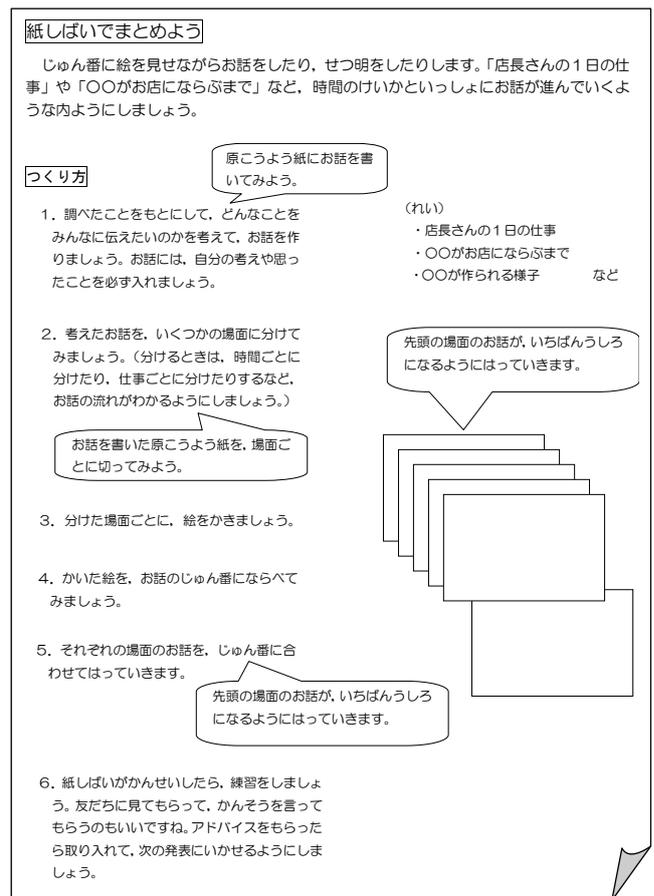


図2-7 提示資料：紙芝居でまとめる具体例

- (28) 前掲(25) p. 115
- (29) 前掲(25) p. 115
- (30) 大森照夫『社会科基本用語辞典』明治図書 1977. 10 p. 130
- (31) 東京書籍『新編 新しい社会』3・4年上下 5年上下 6年上下 2005
- (32) 北俊夫『小学校社会科の「資料活用能力」の実態に関する研究』岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究第7巻 2005 p. 52
- (33) 前掲(32) p. 53
- (34) 中島嘉之「写真の見方・解釈の仕方のコツ」『社会科教育』明治図書 2008. 5 p. 11
- (35) 安野功「言語力を育成する授業の研究ポイント」『学校マネジメント』明治図書 2008. 6 p. 32
- (36) 井上尚美『思考力育成への方略-メタ認知・自己学習・言語論理-』明治図書 2007. 4 p. 26
- (37) 北俊夫「社会科の質的充実かかわる重要課題」
- (38) 安藤照子ら 児童心理学講座4『認識と思考』金子書房 1979. 10 p. 284
- (39) 文部省『小学校学習指導要領解説社会編』1999. 5 p. 14
- (40) 谷川彰英「問題解決学習」『新社会科指導法事典』1979. 7 p. 388
- (41) 藤井千春「問題解決学習」『社会科教育事典』ぎょうせい 2000. 10 p. 214
- (42) 前掲(41) p. 214
- (43) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画社会科』2005. 4 3・4-社-4
- (44) 角屋重樹「『生きる力』の育成と学習意欲の向上」『初等教育資料』東洋館出版社 2008. 10 p. 4

第3章 授業実践での様子

小学校第3学年を対象に、「京都市のまちの様子」と「商店のはたらき」の2つの単元で、学習ハンドブックを活用した授業実践を行った。その実践の様子を、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」の問題解決的な学習の過程に沿って報告する。そして、学級全体の様子と子どもの姿から指導・支援の有効性について検討する。

第1節 「京都市のまちの様子」での実践

(1) 授業の中の子どもたちの様子

本単元では、自分たちの住んでいるまちと、京都市にある他のまちの様子が、どのように違うかを、観察・調査したり資料を活用したりして調べ、市の地域による特色の違いを理解する学習である。

本単元の目標は、以下のとおりである。

- ・市の様子は地域によって違いがあることやそれぞれの地域の特色を理解し、自分たちが日々生活している市に対する誇りと愛情をもつようにする。
- ・市の特色ある地形や土地利用などの様子、主な公共施設の場所と働きを、観察・調査したり資料を活用したりして調べ、白地図などに分かりやすく表現し、市の地域による様子の違いや特色を具体的に考えるようにする。

これらの目標を達成するために、京都市の指導計画を参考にしながら、以下のような単元計画を作成し、実践を行った。

単元計画の主な流れ

<出会う>

- ①京都市全体の写真を見て気づいたことを話し合う。
- ②京都市内にある他のまちの様子について知っていることを話し合う。

<つかむ>

- ③京都市のまちの様子を調べる計画を立てる。

<調べる>

- ④⑤⑥
京都市のまち様子について調べる。
- ⑦京都市のまちの様子について、調べたことや考えたことを話し合う。
- ⑧京都市にある主な公共施設の場所と役割について調べる。

<まとめる>

- ⑨⑩
京都市のまちの様子について、調べたことや考えたことをガイドマップにまとめる。

①「出会う」過程

まず、地形や土地利用の特徴を、写真を通してつかむために、「空の旅に出かけよう。」と呼びかけて、インターネットで世界各地の写真を見た。「海が広がっている。」「あそこは山かな。」「砂漠のようだ。」などつぶやきながら写真を興味深く見ていた。そして、様々な国の写真を見た後、自分たちが住んでいる京都市の地形や土地利用などの特徴をより詳しくとらえるために、京都市のまちの様子がわかる写真を、図2-2(p. 12)の「写真を読み取る視点」に沿って見る活動を行った。一枚の写真をじっくりと見る活動は初めてなので、これらの視点の中から、まずは2つの視点に絞って写真を読み取るようにした。

- ①見たまま、感じたまま、不思議に思ったこと
- ②色・形・大きさ、山・川の様子

最初は、「この写真を見て、どんなことを感じたかな。」「どんなことを思ったかな。」と投げかけ、写真を見た第一印象をできるだけ多く出すようにした。

次に、「写真をもっと詳しく見てみよう。」と呼びかけ、色・形・大きさ、山・川の様子に注目して写真を見るよう指示した。そして、視点に沿って、写真から読み取ったことをノートに書くようにした。子どもたちは、京都市のまちの様子を写した航空写真から多くの情報を取り出していた。子どもたちがノートに書いた内容は下のとおりである。

写真から読み取ったことをノートに書き出した例

- ・北、東、西の方はみどりが多い。
- ・南はみどりが少ない。
- ・山でかこまれている。
- ・まちの真ん中は、空から見るとねずみ色をしているみたい。
- ・ねずみ色をしているところは、家やたてものだと思う。
- ・家やたてものをみどりがかこんでいる。
- ・東の方のYのかたちをした線のようなものは何かな。
- ・Yのかたちをしたものは川だと思う。
- ・道路や線路が集まっているところがある。
- ・まちの真ん中にしかくい形をした森のようなところがある。

これらの記述からは、色や形に注目して写真を読み取っていることがわかる。緑色をしているところは山であるということや、Yの形をしたような線は川だということなど、写真から見えるものが何であるかを自分なりに考えながら読み取っていると思われる。そして、京都市が山で囲まれて

いることや、中心部が、家や建物が多く並んでいる市街地であることなどをとらえていた。

しかし、児童一人一人の読み取りの能力に差があり、読み取ったことが断片的で、自分の知っていることとつなげたり考えたりしながら読み取ることが十分にできていないと思われる記述も見られた。そこで、次時の活動では、写真から読み取ったことや疑問に思ったこと、また、京都市のまちの様子で自分が知っていることなどについて交流した。

友だちの発表を聞くことで、自分が疑問に思ったことや、写真から読み取った断片的な内容つながりを見出し、「線路のようなものが集まっているところがある。」「それは京都駅で、多くの電車が集まる駅だ。」などというように、友だちから聞いたことと読み取ったこととつなげて考えようとする姿が見られた。

②「つかむ」過程

交流する活動の最後には、読み取った事実から自分が疑問に思ったことや調べたいことを出し合った。以下は、児童が疑問に思ったことや調べたいと思ったことの一例である。

疑問に思ったことや調べたいと思ったこと

- ・写真で見ると京都市の南の方はきみどり色をしている。
→田んぼや畑なのだろうか。
- ・山に囲まれたところにVの形をしたところがある。
→まちがあるのだろうか。
- ・西の方にも大きな川が流れているようだ。
→どこまで流れているのだろうか。
- ・緑で囲まれたしかくいところがある。→何かな。

このように、疑問や調べたいと思ったことを、追究活動をする際のめあてにする必要があると考えた。そこで、下のような学習問題の文型を提示した。ここでは、それらの文型を参考にして、疑問に思ったことや調べたいことから、自分がどのようなことを調べていくのか、調べるめあてをつくる活動を行った。

表3-1 学習問題の文型

様子や仕組みについて知りたいとき	どのようになっているのだろうか。 どんな～だろう。 どんな～をしているのだろうか。 どのくらい～しているのだろうか。 どんな工夫をしているのだろうか。
わけや理由が知りたいとき	どうして～だろう。 なぜ～だろう。

これらの文型を参考にしながら、児童は、以下のような調べるめあてをつくった。

調べるめあて

- ・京都市の南の方の様子はどうなっているのだろうか。
- ・山に囲まれたところはどんな様子だろう。
- ・西の方にある川はどこまで流れているのだろうか。
- ・緑で囲まれたしかくいところはどんなところだろう。

このように、調べるめあてを基に、一つの場所や地域を調べるときをきっかけにして、それらのまわりの地域の様子をさらに調べていこうと呼びかけた。そして、一人一人のめあてを集約する形で、以下のような学級全体の学習問題を設定した。

<学級全体の学習問題>

京都市のまちの様子は、どのようになっているのだろうか。

その後、自分がどのように調べていくのか、方法を考えてノートに書くようにした。しかし、子どもたちが書いた方法では、十分に調べきれないようなものも多く、効果的に調べられるようにするためにはどのような方法で調べたらよいかを、指導者が個別に支援する必要があった。

③「調べる」過程

子どもたちが、自分で「～の方法で調べよう。」という見通しをもつことができても、実際に調べる活動に入ると、どのように調べてよいかわからなかったり、自分の考えた方法では調べることができなかつたりすることがある。そこで、いくつかの調べる方法を具体的に提示することで、それらの中から自分で方法を選んで追究活動ができるようにした。次頁図3-1は、学習ハンドブックに示した調べ方の具体例である。

子どもたちは、自分のめあてに沿って調べていた。地図で調べきれない場合は図書資料で、図書資料で調べきれない場合はインターネットで、というようにしながら、一つの方法で調べきれない場合は、これらの中から別の方法を選んで調べる姿が見られた。

一方、調べ学習が進む中で、自分が調べている場所や周辺のまちの様子が、京都市のどのあたりの場所になるのかがはっきりととらえることができにくくなっている児童の姿も見られた。そこで、導入時に見た写真や副読本の地図に立ち返り、調べた場所や調べた内容をそれらに簡単に記入するように指示をした。その結果、京都市全体のまちの様子と自分が調べた地域の位置関係をとらえる

本で調べる

本で調べるとしても、わたしたちのまわりには、

- ・教科書
- ・しり集
- ・図かん
- ・百科事てん
- ・じ書

など



たくさん本があります。その中から、自分の知りたいことが書かれている本を上手に見つけ出しましょう。そのために……

調べたいことをみじかい言葉にする。

ことが大切です。

たとえば……

「京都市のまちのようす」

について調べたいとき

「京都市」 「まち」

このように、みじかい言葉にします。その言葉がキーワードになります。

そして、その言葉をたよりにして本をさがしていくと、自分の知りたいことが書かれている本を上手に見つけ出すことができます。



図3-1 提示資料：本で調べる具体例

ことができ、調べたことを手がかりにしてさらに詳しく調べることができた。

また、調べた内容は必ずノートに書くように指示をした。3年生の段階では、調べたことをまとめたり大事なところだけを抜き出したりすることは難しいと考えた。そこで、自分が調べた内容はすべてノートに書き、後で自分のめあてと照らし合わせて、大事な部分だけに印をするようにした。

図3-2は、「山に囲まれたところはどんな様子だろう。」というめあてをもった児童が、調べたことをノートに書いた一例である。

ノートの記述 (抜粋)

- ・北西の山の中
- ・小学校
- ・キャンプ場
- ・神社
- ・田んぼのようなもの
- ・寺
- ・森林組合加工センター
- ・町のかたち
- ・まわりは山でかこまれている
- ・しぜんがいっぱいな町

図3-2 調べたことを書いたノート例

ノートの記述からは、地図や図書資料を基にしながら調べ、山に囲まれた地域の様子について自分なりに考えていることがわかる。

その後、調べたことをより確かなものにするために、調べたことを交流する活動を行った。交流することで、自分が調べた内容だけでなく、京都市の様々な地域の様子を知ることができるからである。また、自分の調べた内容が友だちと同じであっても、違う視点から自分が調べた内容を見つめることができ、たとえ自分が十分に調べ切れなかったとしても、友だちの発表を聞くことで、理解が得られるからである。

実際に交流する活動の最初は、自分が調べたことを一方的に発表するだけであったが、指導者がそれぞれの発表をつなげながらまとめる



図3-3 調べたことを交流する様子

ことで、地域によって様子に違いがあることを徐々に理解していった。

交流する活動の最後には、交流して思ったことや考えたことをノートに書いた。

児童のノートから

- ・わたしは、京都にはいろいろなひみつがあるんだなとおもいました。びわこから、そ水がひかれていることをはじめて知ってびっくりしました。
- ・写真で見た南の方にあるうすい緑のところは、田んぼや畑だとは知りませんでした。南の方には、あまり山がないんだなと思いました。
- ・わたしもYの形をしたかも川のことを調べて、かも川と高野川がつながってかも川になっていることがたしかめられてよかったし、また見たりしたいです。
- ・こうずいが多かったのので、人がなおした。つけかえしたのかもしれない。今はYの形になっているけど、もともとそんな形ではなかったかもしれない。
- ・京都市の中心には、いろいろなしせつがあり、にぎやかなまちということがわかりました。
- ・京都には、神社や寺院がたくさんあると思いました。神社のほかにもご所や二条城があり、何年も前からあるということがわかりました。
- ・わたしは、山にかこまれたところにも、家や学校がある事は知らなかったから、わかってよかったです。

これらの記述からは、調べたことを交流することで、京都市のまちなみの全体像を少しずつ理解しようとしているのがわかる。京都市のまちなみの

様子について確かな理解をするために、自分が調べたり聞いたりしたことを、地図や文字にして表すことが必要となってくる。

④「まとめる」過程

調べたことや交流を通して考えたことなどを、白地図にまとめるようにした。白地図にまとめることで、京都市の地形や土地利用の特徴をわかりやすくとらえることができると考えたからである。そのために、図3-4のような白地図でのまとめ方の手順を示した具体例を提示した。

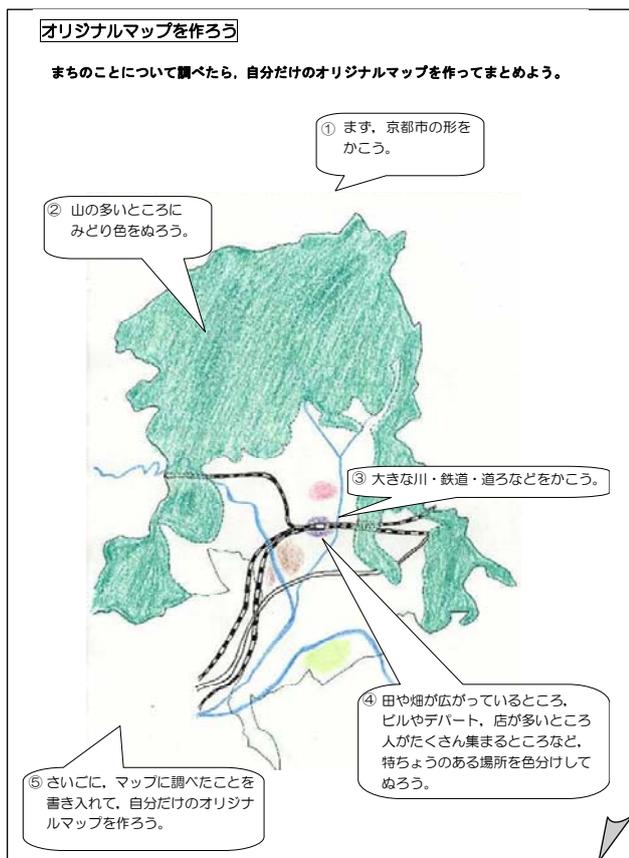


図3-4 提示資料：白地図でまとめる具体例

このようなまとめ方の具体例を参考にしながら、自分だけのオリジナルマップをつくる活動を行った。具体例に示した手順では、京都市の地形を薄くかたどったワークシートを作成し、その地形をなぞってかき、京都市の地形がどのような形をしているのかをとらえられるようにした。次に、山や川、主な道路や路線図などをかき入れ、田や畑が広がっているところ、人が多く集まる場所など、土地利用の様子がわかるように地域ごとに色分けをしながらかき入れられるようにした。

さらには、自分が調べたことや考えたこと、交流をしてわかったことなどを付箋紙に書いて貼るようにした。付箋紙に書いて貼ることで、短くま

とめて自分の思いや考えを表現することができ、また、それが自分の学習の足跡として残すことができるのである。図3-5は、児童がマップ作りをしている様子である。



図3-5 マップ作りをしている様子

自分が調べた、古くから残る建造物の所在をかき入れたり、地図記号をかき入れたりするなど、調べたことや考えたことを児童が自分なりに工夫しながらまとめる姿が見られた。また、調べたことや考えたことを書いた付箋紙が、学習の足跡として増えていくことを実感し、さらに意欲をもってまとめる姿も見られた。

学習の最後には、これまでの学習を振り返っての感想をノートに書いた。下に示しているのは、児童が書いたノート例である。

児童のノートから

ぼくは、今までの社会の勉強をして、三ぼうを山でかこまれていて、すごい高い山もあって、1200年前からあるご所とかすごいれきしがあって、よく京都市のことがわかりました。あと、しぜんもいっぱい、きれいな川もあるから、ここに生まれてよかったです。

すべての児童が、このように、自分たちの住んでいる京都市に愛情をもっていることがわかるような記述ではなかったが、他の児童のノート例からは、「京都市のまちの様子がわかった。」「酒つくりがさかんなのは、おいしい水があるからだ。」など、京都市の地域の様子や特色を理解していると思われる内容が見られた。

(2) 授業から見えてきたこと

3人の児童に焦点を当て、以下のような手だてが有効であったかを、本研究で大切にしたいと考える3つの視点で分析する。

○資料を読み取る能力の育成

- a. 視点に沿って写真を読み取る活動

○言語活動の充実

- b. 書いたり話したりする活動
- c. 白地図にまとめる活動

○問題解決的な学習の過程

- d. 学習ハンドブックを使った学習活動

①A児の姿を通して

a. 視点に沿って写真を読み取る活動

京都市のまちの様子がわかる航空写真を見て、次のような情報を取り出していた。

- ・京都市はみどりが多いです。とくに北が多いです。
- ・二じょうじょうは、京都のまんなかくらい。
- ・ごしょもまんなかくらい。
- ・西に金かく寺がある。
- ・しましまのたてものがある。

色や形に注目して写真を見ているが、その記述は少なく、自分が知っていることを見つけて書いているように思われる。また、南の方にある建物に注目しているが、それが何なのか知りたいという思いにまでは至っていない様子である。

b. 書いたり話したりする活動

交流では自分が見つけたことを話していた。他の児童も、二条城や御所の様子が気になっていたようで、緑で囲まれた四角の形をしたところが、二条城や御所であることを話すと、他の児童から「大きなところだな。」と感心する声が聞かれた。

そして、交流する活動を通して、次のような調べるめあてをつくった。

- ・なぜ、かも川がYの形をしているのだろう。

他にも、「ごしょには行ったことがないから、もっとじっさいに行ってみてみたいです。」「二じょうじょうもしらべたいです。」とノートに書いている。御所や二条城など、初めに見つけた内容を中心に調べたいようだったが、交流で、他の児童がYの形をした川のことを話すと、そのことに関心が向いたようであった。

c. 白地図にまとめる活動

まとめ方の具体例を参考にして、意欲的に白地図にまとめることができた。自分が調べた川や山のことを中心に書きまとめている。しかし、付箋紙の記述では、調べたことや交流を通して知った事実が多く、思ったことや考えたことの記述は少なかったようである。

d. 学習ハンドブックを使った学習活動

本やインターネットの調べ方の具体例を参考にしながら、自分もっためあてに沿って調べることができた。調べたことをまとめたノートの記述からは、川のことやその周辺の様子など、詳しく調べていることがわかる。

しかし、調べたことを交流する活動で書いた振り返りの記述は、友だちが発表した二条城のことについて書かれており、実際に二条城や御所に行って調べたかった思いが垣間見られた。

②B児の姿を通して

a. 視点に沿って写真を読み取る活動

京都市のまちの様子がわかる航空写真を見て、次のような情報を取り出していた。

- ・西に川がある。
色…ブルー 形…ほそなが
- ・北の山の中に家のようなものがある。
色…? 形…四角
- ・北の山に町がある。
色…白 形…丸 大きさ…?

写真を読み取る視点を提示したことで、色や形や大きさに注目して写真を見ることができたようである。また、写真に写っている大きな川を線で囲んでいる。この段階では、山に囲まれたところに家や町があるという内容は、児童の予想である。

b. 書いたり話したりする活動

交流では、自分が見つけたことを全体で発表することができなかった。しかし、友だちの発表から、「大文字はいつからできたのだろう。」「大文字は何しゅるいあるのだろう。」「西の川はどうやってできたのだろう。」など、新たな疑問や調べたいことをノートに書いていた。最終的には、次のような調べるめあてをつくった。

- ・なぜ、京都はみどりが多いのだろう。

B児は、緑色をしたところは山であるという思いをもっていた。そして、京都の山について調べていた。また、調べたことをノートに書き、自分が大事だと思う言葉に印をして、その言葉を使って調べたことをまとめていた。

c. 白地図にまとめる活動

まとめ方の具体例を参考にして、地域による土地利用の違いを色分けしてまとめていた。しかし、自分が調べたことのみを記述にとどまっておらず、思ったことや考えたことの記述は少なかった。

d. 学習ハンドブックを使った学習活動

B児は、緑色をした山の部分がなぜこんなに多いのかを、調べ方の具体例に提示した、インターネットのWEBページを見て調べていた。京都市の北は、40もの山々が連なっていることや、山に囲まれた町の様子についても調べていた。また、京都市内を流れる川が、自分が調べた山々から流れ出ていることを知って大変驚いていた。

このように、写真から取り出した情報を書いたり友だちと話したりする活動を通して、調べたいことが明確になり、調べるめあてをつくることができたと考えられる。また、調べ方の具体例を活用しながら学習を進める姿も見られた。

③C児の姿を通して

a. 視点に沿って写真を読み取る活動

京都市のまちの様子が見える航空写真を見て、次のような情報を取り出していた。

- ・①北…緑が一番多い。
- ・②南…山（緑）が少ない。
- ・③東…おか（緑）がある。
- ・④北西…大きな川がある。
- ・⑤真ん中に町がかたまっている。

写真に自分で線を書き入れ、京都市のまちを①から⑤の地域に分け、地形の様子を読み取っている。緑色をした部分の面積や色の濃淡で、山であるかどうかを考えながら読み取っていることが推察できる。

b. 書いたり話したりする活動

交流では、自分が読み取ったことを発表していた。自分が読み取ったことや交流で聞いたことから、京都市の地形についてある程度とらえることができている様子であった。したがって、自分の気づきや疑問よりも、友だちの気づきや疑問に関心を示した様子であった。交流を通して、「京都市はどうして川が多いのかな。」「どうして南だけ山がないのかな。」と疑問に思ったことや調べたいことをいくつかノートに書いていたが、最終的には次のような調べるめあてをつくった。

- ・どうしてお寺や神社は山ぞいに多いのか。

交流をすることで、友だちが、お寺や神社や大文字山などについて話したことを聞いて関心をもち、このようなめあてをつくったと思われる。

c. 白地図にまとめる活動

白地図のまとめ方の具体例を参考にすることで、意欲的にまとめることができたと思われる。付箋紙には、自分が調べた寺のを中心にして書きまとめている。「東の方や西の方は、山ぞいにお寺が多く立っているが、西本がんと東本がんとは、まち中にある。」というように、寺の所在の比較をしている。調べた内容を、それぞれ自分なりに比べて考えている様子が見える。

d. 学習ハンドブックを使った学習活動

C児は、寺や神社が山沿いに多い理由を、調べ方の具体例を参考にしながら、本やコンピュータを使って調べていた。しかし、調べたことをまとめたノートの記述には、他の内容が多くあり、必ずしも自分のめあてに沿った調べ活動ができていたとはいえない。活動を進める中で、もっと他に自分の関心があることに出会ったのではないかと考えられる。

このように3人の児童の姿を分析すると、次のような成果と課題が考えられる。

○資料を読み取る能力の育成

どのようなものを見つけたらよいのかを具体的に確かむことができにくい児童にとっては、写真を読み取る視点を提示することで、色や形に注目しながらより多くの情報を取り出すことができたと考える。今後は、取り出した事実を、比べたりつなげたりして考える活動が必要である。

また、読み取る能力やこれまでの学習経験などの違いなどにより、読み取った内容を深める過程で差が見られた。読み取った内容を基にして学習を進めていくには、児童の思いを引き出すために言葉かけをするなどの個別の支援をしたり、話し合い活動などを通して読み取った内容を共有化したりすることが必要であると考えられる。

○言語活動の充実

調べたことや取り出した情報を言葉にして書き出すことで、書いた内容を見ながら考えることができた。子どもたちが考えをもつためには、その基盤となる情報を目に見える形で表すことが効果的だと考える。

また、調べた内容の中で、大切だと思う言葉に印をつけ、その言葉を使って文をつくる活動をしたことで、調べたことを自分でまとめる一つの方法を経験できたと考えられる。

白地図にまとめる活動は、どの児童も意欲的に行うことができた。しかし、思ったことや考えたことをノートに書いていても、白地図に書き入れてまとめていた児童は少ない。調べたことだけではなく、思ったことや考えたことも書き入れてまとめるためには、ノートを見て、学習したことを振り返るようにする必要があったと考えられる。

○問題解決的な学習の過程

「京都市のまちの様子」の単元では、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」の問題解決的な学習の流れをつかむために、個人追究を大切に学習を進めた。このような流れで学習を進めることはつかんでいたが、最後まで自分で明確な問題意識をもって学習を進められた児童は少なかった。これは、一枚の写真から学習問題をつくったため、「～について調べたい。」という問題意識を十分に醸成できなかったからであると考えられる。子どもたちが「調べたい。」「確かめたい。」という思いがもてるように、調査・聞き取りなどの体験的な学習活動を取り入れながら、学習問題を醸成する必要があると考えられる。

第2節 「商店のはたらき」での実践

(1) 授業の中の子どもの様子

本単元は、身近な地域の商店を取り上げ、地域の人々の販売に見られる仕事の工夫や、販売の仕事が様々な面で他地域とつながっていることを、見学や調査などを通して学習する。

本単元の目標は、以下のとおりである。

- ・身近な地域では、人が販売に関する仕事をしていることに興味をもち、その仕事わたしたちの生活を支えていることがわかるようにする。
- ・身近な地域の販売活動の様子について、見学・調査したり、表現したりすることを通して、仕事の特色や仕事に携わる人々の工夫、自分たちの生活とのかわり、他地域との関連を具体的に考えるようにする。

これらの目標を達成するために、京都市の指導計画を参考にしながら以下のような単元計画を作成し、実践を行った。

単元計画の主な流れ

<出会う>

- ①身近な地域のどこで、どのような人が働いているか話し合い、人々の仕事について関心をもつ。
- ②買い物について知っていることや気づいたことを話し合い、買い物や店、販売の仕事について関心をもつ。
- ③④家の人が、どこでどのようなものを買っているかを調べて、その結果をまとめて発表する。

<つかむ>

- ⑤買い物調べを基に、気づいたことや不思議に思ったことについて話し合い、追究したい学習問題をつくる。
- ⑥学級全体の学習問題を基に、自分の学習問題をもち、予想をして、調べる計画を立てる。

<調べる>

⑦⑧⑨⑩

〇〇を見学して自分の学習問題について調べる。

<まとめる>

⑪⑫

調べてわかったことや考えたことをまとめる。

- ⑬調べてわかったことや考えたことを発表する。
- ⑭学級全体の学習問題の解決に向けて話し合う。
- ⑮品物の産地調べを基に、他地域とのつながりについて知る。
- ⑯品物を売るほかにどんなサービスをしているのかを調べ、お店が地域と協力していることを知る。
- ⑰地域のいろいろな店について話し合う。

①「出会う」過程

まず、人々の仕事について関心をもつために、身近な地域の、どこで、どのような人が働いているかを話し合った。また、市販されている商品の実物を取り上げ、商品が私たちの手に届くまでに、どのような人がかかわっているかを話し合った。

「商品をつくる人。」「原材料をつくる人。」「商品の検査をする人。」「販売する人。」などの意見が出され、私たちの見えないところでたくさんの方がかかわっていることに気づき、生産や販売の仕事について関心をもつことができた。

そして、私たちがどこで、どのようなものを買っているのかを詳しく知るために、家の人にインタビューをしたりレシートを集めたりしながら、買い物について調べる活動を行った。この活動は、一定期間の個人の調べ学習になるので、児童が見通しをもって意欲的に追究することができるように、調べ方やまとめ方を具体的に提示し、それを参考にしながら調べられるようにした。

図3-6は、学習ハンドブックに提示した買い物調べの具体例である。その具体例を活用しながら、児童は家の人の買い物について調べ、その結果をノートにまとめた。図3-8は児童のノート例である。

買い物調べ **レシートを調べよう**

おうちの人にたのんで、レシートをのこしておいてもらいましょう。集まったレシートを見て、どのお店で、どんなものを買っているかを調べましょう。

レシートのれい

レシートには、

- ①お店の名前
- ②買った日にち
- ③買ったしなもの
- ④買ったしもののねだんなどが書かれています。いつ、どこで、なにを買ったかを見つけてみましょう。

〇〇スーパー		フルーツ 〇〇屋	
2008年9月1日(月) 12:08		2008年9月1日(月) 13:36	
パン	¥165	バナナ	¥298
牛乳	¥210	いちご	¥498
洗剤	¥398	りんご①20×3	¥360
魚	¥598		¥1156
	¥1371	合計	¥1156
合計	¥1371		

↓

こんなふうにまとめられるよ。

買った日	買ったお店	買ったもの	おうちの人の話
9月1日(月)	〇〇スーパー (西大じお池) (〇〇さんのマンションのとなり)	パン(食料品) 牛にゅう(食料品) 洗ざい(日用品) 魚(食料品)	おうちの人から、 買い物をしたとき の話や、 <u>そのお店 をえらんだ理由を 聞いて書いておこ う。</u>
	フルーツ 〇〇屋 (三じょうおん前)	バナナ(食料品) いちご(食料品) りんご3こ(食料品)	
9月2日(火)	〇〇鮮魚店 (お池通りとおん前通 りのかど)	おさしみ(食料品) 焼き魚(食料品)	ねだんも書いてもいいよ。 同じ品物なら、お店でねだん のちがいがくらべられるね。 (〇〇店のほうが安いよ。)

図3-6 提示資料：買い物調べの具体例

調べ方やまとめ方を具体的に提示することで、ほとんどの児童が、一定の期間買い物について調べノートにまとめることができたが、児童によっては、レシートを十分に集めることができなかつたり、各家庭での買い物の形態に違いがあったりなど、結果が十分に得られないこともあった。

そこで、調べた結果をグループで持ち寄って合わせることで、どこで、どのようなものを買っているかを量的にとらえられるようにしたいと考えた。



図3-7 買い物調べの結果を交流する様子

発表が進んでいく中で、子どもたちは、店の名前を書いた付箋紙を動かしたり同じ場所に集めたりしながら、店や品物の種類を分類していった。

その結果、どこで、どのようなものを買っているかが、画用紙に貼られた付箋紙の数でわかるよ

買った日	買ったお店	買ったもの	¥	うちの人の話
% (土)	アイエオン	お肉、お肉	238	近いかから
	前の心	バナナ	78	
	ジのフジ	お肉、お肉	88	
	き	お肉、お肉	88	
		お肉、お肉	298	
		お肉、お肉	148	
		お肉、お肉	88	
% (日)	スーパーハウス	お肉、お肉 X 8	150	近いかから
	セブンイレブン	お肉、お肉 X 2	105	
% (月)	京都生活	お肉、お肉	141	近いかから
	協同組合	お肉、お肉	95	
	エーティ	お肉、お肉	88	
	スーパー	お肉、お肉	147	
	市場	お肉、お肉	330	
% (火)	フレッシュ	お肉、お肉 X 2	58	近いかから
	フレッシュ	お肉、お肉	148	
	フレッシュ	お肉、お肉	100	
	フレッシュ	お肉、お肉	115	
	フレッシュ	お肉、お肉	115	
	フレッシュ	お肉、お肉	115	

図3-8 買い物調べの結果をまとめた児童のノート

うになった。また、次の活動では、付箋紙の数をわかりやすく表せばよいという見通しをもつことにもつながった。

そして、分類したものを数値化してグラフに表す活動を行った。その活動を、子どもたちが見通しをもって主体的に行えるようにするために、図3-9のようなグラフのまとめ方の具体例を、学習ハンドブックに提示した。

グラフのまとめ方の具体例に、買い物をした店の回数を「正」の字で整理することや、縦軸・横軸にどのようなことを書き入れるかを具体的に示した。そうすることで、子どもたちが、どこにどのような内容を書けばよいのかを具体的にイメージできるのである。

子どもたちは、まとめ方の具体例を参考にしながら、買い物調べの結果をグループの友だちと協力してまとめていた。中には、買い物をした店ごとに色分けをしたり、思ったことや考えたことを書き入れたりしてまとめていた。また、グラフではなく、表でまとめたグループもあり、買い物調べの結果を子どもたち自身で工夫してまとめることができた。

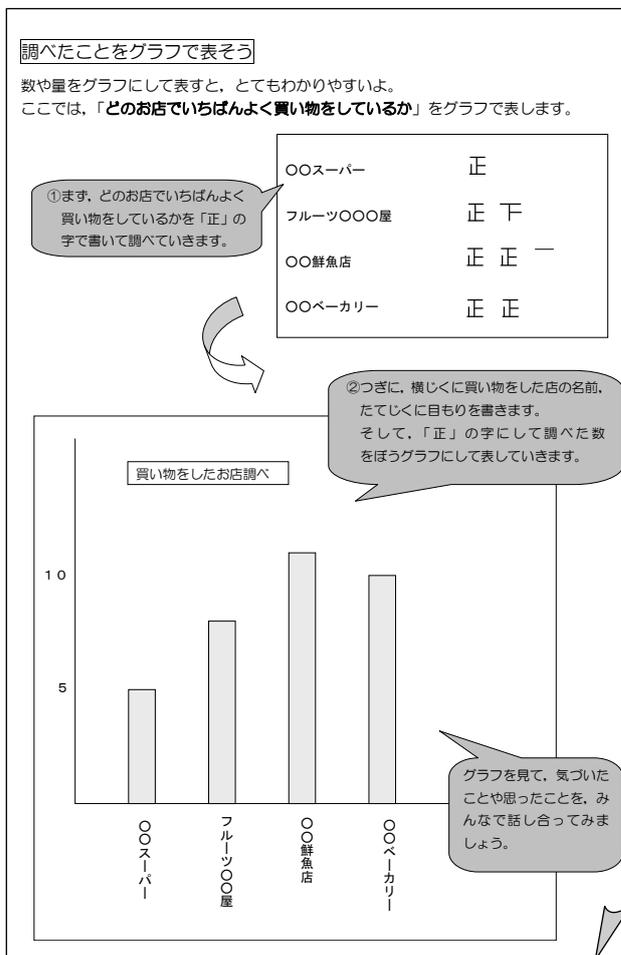


図3-9 提示資料：グラフのまとめ方の具体例

その後、まとめたことを基にして、みんながどこで、どのようなものを買っているのか、買い物調べの結果をグループごとに発表した。利用する回数が多い順にしたり、調べて気づいたことや思ったことを付け加えたりして発表する姿が見られた。



図3-10 買い物調べの結果をグループでまとめて発表する様子

②「つかむ」過程

次時では、買い物調べの結果をまとめたものやグループの発表から、思ったことや気づいたことを付箋紙に書く活動をした。

実際には、指導者の「思ったことや気づいたことを書きましょう。」という指示だけでは、十分に書くことができなかつたり、何をどのように書けばよいのかわからなかつたりする児童がいた。

そこで、児童が付箋紙にできるだけたくさんのおもいや気づきを書けるようにしたいと考え、「発表を聞いて、『あれ?』『ええ!』と思ったことを書いてみよう。」という指示をした。児童は、買い物調べの結果をまとめたものやグループの発表から、「たくさんの人がA店で買い物をしている。」「B店も人気がある。」「家の人は食料品を多く買っている。」といった内容を付箋紙に書いていた。

次に、付箋紙に書いた思ったことや気づいたことを基にして話し合い、自分たちが追究したい学習問題をつくる活動をした。

まず、学習問題をつくるために、付箋紙に書いた思ったことや気づいたことを、前掲図2-3(p. 13)の学習問題の文型に自分であてはめて書くようにした。「たくさんの人がA店で買い物をしている。」「B店も人気がある。」「家の人は食料品を多く買っている。」といった記述は、学習問題の文型にあてはめて書くことで、「どうしてたくさんの人がA店で買い物をしているのだろう。」「なぜB店は人気があるのだろう。」「なぜ家の人は食料品を多く買っているのだろう。」という記述になった。

しかし、学習問題の文型にあてはめるだけでは、「出会う」場面でもったおもいや気づきから、自分

が調べたい問題へとつなげていく道筋を理解するには不十分であると考えた。

そこで、学習ハンドブックに提示している前掲図2-3(p. 13)と図2-4(p. 13)の、学習問題をつくる道筋を示した具体例を活用しながら学習問題を付箋紙に書いた。そうすることで、児童からは、「なるほど。」「このことを調べたらいいんだ。」といった声が聞かれ、これからどのようなことを調べるのか見通しをもつことができた。

その後、学習問題の質をより高めるために、書いた付箋紙を出し合いながら、グループで話し合



図3-11 学習問題の質を高めるために話し合う様子

う活動をした。指導者は、交流をする際の視点として、出し合ったものの中で、調べてもわからないものや、すぐにわかるものはないかどうか、精選するよう助言した。児童がどのような方法で調べても解決できなかつたり、見てすぐに解決できたりする学習問題では、意欲的に追究することができにくいと考えたからである。

交流では、「なぜ近くの店が多いのだろう。」「どうして校区内と校区外のお店があるのだろう。」といった学習問題もあったが、話し合いを進める中で精選され残ったものが、「なぜA店で買い物をする人が多いのだろう。」「どうしてB店は人気があるのだろう。」という学習問題であった。

校区内や校区の近くには、他にも多くの店があるが、その中でも一番多く利用されているのがAとBの二つの店であった。子どもたちは、買い物調べの結果をまとめたものや、グループの発表から、AとBの二つの店がよく利用されていることに驚き、「なぜかな。」という疑問をもった様子であった。そして、グループで話し合ったことを全体で交流した。どのグループでも「なぜA店で買い物をする人が多いのだろう。」「どうしてB店は人気があるのだろう。」という学習問題が多く出された。そこで、指導者は、出し合った学習問題を集約する形で、以下のような学級全体の学習問題を設定した。

<学級全体の学習問題>
なぜ、A店やB店で買い物をする人が多いのだろう。

その後、一人一人が学習問題に対して、以下のように予想した。

A店の予想	B店の予想
<ul style="list-style-type: none"> 品物の値段が安いからだと思う。 お弁当やおはんのおかずが、たくさんあるからだと思う。お母さんが忙しいとき、おかずを買ってきた。 みんなの家から近いからだと思う。 駅のすぐ近くだから、仕事の帰りに買い物ができる。 24時間開いているからだと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 品物が新鮮だからだと思う。 よい品物があるからだと思う。家の人が安心だと言っていた。 トラックで品物を運んでくれて、いろいろなサービスがあるからだと思う。 駐車場があって便利だからだと思う。 お店が広くてレジも多いし、ベビーカーも通れるからだと思う。

子どもたちは、家の人と買い物に行った経験や、買い物調べで聞いた内容を思い出しながら、様々な予想をしていた。

そして、自分の予想をどのようにして確かめるのか、その方法を考えた。子どもたちからは、「お客さんに、なぜこの店を選んだのか、インタビューをする。」「店員さんに、どんな品物を置いているのかを聞く。」「店員さんに、どんなサービスをしているのかを聞く。」「お店に行って、品物の値段を確かめる。」「お店に行って、店のまわりの様子を調べる。」などの意見が出た。そして、指導者は、学習問題を解決するためには、売る側の工夫と買う側の工夫の両面を調べる必要があることをおさえ、「お店に行って確かめよう。」とうながした。また、子どもたちの予想を、値段・品物・工夫・サービスのテーマに分類し、それぞれのテーマごとにグループを作った。そうすることで、グループの全員が同じ視点で見たり聞いたりでき、より効果的な追究活動ができると考えたからである。

さらに、インタビューの方法やメモのとり方など、図3-12の学習ハンドブックに提示したインタビューの仕方の具体例を活用しながら学習し、見学の準備を進めた。子どもたちは、インタビューの練習をしたり、短い言葉で話のメモをとる練習をしたりして見学に備えていた。

見学する際には、限られた時間で必要な情報をより多く取り出すことが重要であると考えた。そこで、図3-13の見学する視点を活用しながら、どのようなことに注目して見学をすればよいのかを具体的に理解できるようにした。また、取り出した情報を基に、知っていることと比べたりつなげたりしながら見学できるようにしたいと考えた。

インタビューをして聞いてみよう

- おいそがしいところすみません。
- 〇〇〇小学校の〇年生です。
- 社会科で〇〇について勉強しています。
- お話を聞かせていただけますか。

[れい]

インタビューすること

<お客さん>

- このお店をえらんだのは、なぜですか。
- どんなことに気をつけて買い物をされていますか。

<店の人>

- お客さんに来てもらうために、どんなくふうをされていますか。
- 一日のうちで、お客さんがいちばん多いのはいつですか。

聞いたことは、
かならずメモを
しましょう。

↓

• ありがとうございます。

図3-12 提示資料：インタビューの仕方の具体例

見学するとき、ここに注目!														
①見よう	<ul style="list-style-type: none"> • どんな感じがするかな? • 何が見えるかな? • どんな音が聞こえるかな? • どんなにおいがするかな? 	思ったことや感じたことを書いてみよう。												
②注目しよう	<table border="0"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">はたらく人のようす</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 2px;">しなもの</td> </tr> <tr> <td>• 人数</td> <td>• ねだん</td> </tr> <tr> <td>• 服そう</td> <td>• 量</td> </tr> <tr> <td>• 仕事</td> <td>• 何か書いてあることは</td> </tr> <tr> <td>• 表じょう</td> <td>ないかな?</td> </tr> <tr> <td>• くろうやくふうがわかるかな?</td> <td></td> </tr> </table>	はたらく人のようす	しなもの	• 人数	• ねだん	• 服そう	• 量	• 仕事	• 何か書いてあることは	• 表じょう	ないかな?	• くろうやくふうがわかるかな?		たくさん見つけて書いてみよう。
はたらく人のようす	しなもの													
• 人数	• ねだん													
• 服そう	• 量													
• 仕事	• 何か書いてあることは													
• 表じょう	ないかな?													
• くろうやくふうがわかるかな?														
③くらべよう	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の知っていることとくらべてみよう。(いつも買っている店と同じで～だ。わたしが知っている店とちがって～だった。) • 友だちが見つけたこととくらべてみよう。 	自分が知っていることとくらべて書いてみよう。 友だちと同じところや、ちがうところを見つけよう。												
④つなげよう	<ul style="list-style-type: none"> • つなげて考えてみよう。 • 予想してみよう。(～なのは、たぶん～だから。 など) 	自分の知っていることや友だちの考えとつなげてみよう。												

図3-13 提示資料：見学の視点

③「調べる」過程

子どもたちは、店の見学を心待ちにしている様子であった。まずは、A店から見学をした。

A店での見学の様子

校区内にあるA店は、24時間営業をしており、大きな道路の交差点や地下鉄の駅に面している。付近には高等学校や中学校、大きな工場があり、店に面した通りを挟んで住宅地が広がっている。

まず、グループごとに店内の様子を見学した。子どもたちは、品物の値段や種類、店の人の様子を興味深く観察していた。そして、自分たちがあらかじめ考えていた内容を店長さんに質問した。普段、A店に買い物に来て、何気なく見ている品物の種類や並べ方が、すべて工夫されたものであることを知って驚いていた。話を聞いた後は、もう一度聞いたことを確かめるために、店内の様子を観察したり店員さんに質問したりしていた。



図3-14 A店での見学の様子

子どもたちのメモを見ると、見学を通して以下のような情報を得ていたことがわかる。

<A店を見学・店長さんに質問をして>

- ・ちらしを作って配っている。
- ・品物の値段を安くするために、品物をたくさん仕入れている。
- ・野菜には安全を示す保証書のようなものがある。
- ・15,000種類もの商品がある。
- ・夜おそくても、仕事帰りの人が買い物に来る。
- ・売れ残ったものを捨てないように、値引きを少しでも買ってもらう。
- ・季節によって商品を変えている。

お客さんにインタビューをする時間が十分にとれなかったため、買う側の店選びの工夫は家の人に聞くことにした。その後、買う側の工夫として以下の情報を得ることができた。

<家の人にインタビューして>

- ・その日のちらしを見て、どんな品物が安いかを確かめてから買う。
- ・地下鉄を降りてすぐなので、仕事の帰りに買い物できるから。

B店での見学の様子

隣の校区にあるB店は、大きな通りに面して

いてJRや地下鉄の駅からも近い。店舗面積も広く駐車場がある。付近には住宅地が広がっている。

まずは、店の裏側であるバックヤードを見学した。そこで、多くの人が商品を管理したり補充したりするために働いていることや、多くの品物が用意されていることを知って驚いていた。

続いて店内を見学し、その後、店員さんやお客さんにインタビューをした。品物の値段を調べた児童からは、「A店と同じで、安売りの品物は赤字で目立つように値段が書かれている。」という声が聞かれた。また、品物の並べ方について質問した児童からは、「ボリューム感ができるように並べていることがわかった。」という声が聞かれた。



図3-15 B店での見学の様子

子どもたちのメモを見ると、見学を通して、以下のような情報を得ていたことがわかる。

<B店を見学・店員さんに質問をして>

- ・店員さんは、「いつも明るく元気にあいさつ」を心がけている。
- ・新しい商品を目立つように置いている。
- ・広い駐車場や、自転車をとめる場所がある。
- ・いろいろな魚があつて季節によって変わる。
- ・売れているものをたくさん仕入れている。
- ・「雨の日サービス」というものがある。
- ・品物の前に料理の見本があった。
- ・お店にちらしがあった。
- ・品物はできるだけ薬を使わないようにして、安心できる品物を作っている。

<お客さんにインタビューして>

- ・B店だけにしかない品物があるから。
- ・品物が新鮮で安心できる。
- ・車で来ることができるから。

④「まとめる」過程

二つの店を見学して、多くのことを見たり聞いたりしたので、自分の予想を確かめるための情報がどれであるのかがわからなくなっている様子であった。

そこで、見学やインタビューをして得た情報を基に、自分の予想がどうであったかを考える活動を取り入れた。得た情報を整理して、自分の予想に沿って調べる活動ができたかどうか振り返ることを目的としている。

まず、自分の予想をピンク色の付箋紙に、見学をして得た情報を水色の付箋紙に書いた。

そして、その付箋紙を話し合いシートに貼り、そのシートを基にして、予想がどうであったかをテーマごとのグループで話し合った。話す際には、シートから付箋紙をはがし、画用紙に色ごとに貼って、グループ全員で見学を通して得た情報を出し合った。そして、グループ全員が出し合った付箋紙を見ながら、予想（ピンクの付箋紙）とつながりがある情報（水色の付箋紙）だけを残すようにして整理した。子どもたちは、「このことは予想と関係がないな。」と言いながら付箋紙を動かしていた。

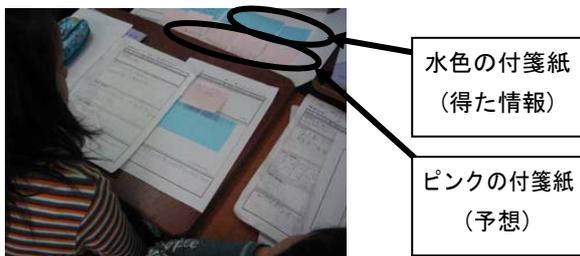


図3-16 話し合いシートを使って予想を確かめる様子

このような姿から、見学に行き得た情報を文字にして付箋紙に書き出し、その付箋紙を動かして整理することで、児童の思考も整理できたと考える。

そして次は、見学したことをグループでまとめる活動をした。まとめる際には、前時の活動で子どもたちが整理した画用紙を基にしてまとめるようにした。指導者は、予想（ピンクの付箋紙）をまとめたタイトルに、見学をして得た情報（水色の付箋紙）をまとめた内容にすればわかりやすいということを助言した。その結果、あるグループからは、「問題・予想・結果・わかったことの順にまとめよう。」という声が聞かれ、どのようにまとめたらよいのかをイメージすることができた。

さらに、図3-17の学習ハンドブックに提示しているまとめ方の具体例を参考にし、その中から方法を選んでまとめるようにした。

まとめる際には、AとB二つの店の内容をまとめるようにした。どのような方法でまとめるかが決まると、まとめ方の具体例と見学に行き得た情報を基にして、構成や割りつけを考えていた。そして、でき上がったものを児童がイメージできると、模造紙や画用紙を用意して進んで活動する姿が見られた。「写真の横に説明を書くとわかりやすい。」「値札みたいに赤色で塗ったらもっと目立つ。」などと話しながら、自分たちで工夫してま

画用紙やもぞう紙に書いてまとめよう
 どんなことをみんなに伝えたいのかを、よく考えてからかこう。

自分がいちばん知らせたいことをタイトルにする、みんなにもわかりやすいよ。

自分が調べたことを、表・グラフ・絵などをつけて、わかりやすくまとめてみよう。

3年O組 OO OO

お客様に聞きました。

〇〇スーパーのひみつ

なぜ、たくさんの方が〇〇スーパーで買い物をするのでしょうか。わたしは、〇〇スーパーにお客さんがたくさん集まるひみつを探しました。

ひみつその1 **ちらしでせんでん**

新聞にはさんでいるちらしで、せんでんをしています。曜日によって安売りをしたり、寿限の当たるちゅうせん会をしたりするサービスがあります。店長さんの話では、ちらしを見て店に来られる方も多いそうです。

ひみつその2 **大きなちゅう車場**

店の屋上には、ちゅう車場があります。お客さんへインタビューをして、速くから買い物に来る人や、一度にたくさんのお買い物をする人にとってべんりだということがありました。

ひみつその3 **たくさんの品ぞろえ**

.....

1位 **ねだんが安い**
 2位
 3位

わたしの予そどうおり、ねだんが安いというのが、いちばんの理由でした。でも、お客さんにインタビューをして、ただ安いだけでなく、安くて安全なものを売りたいというねがいがあることがわかりました。.....

考えたこと

お店に見学に行ったり、店長さんの話を聞いたりして、お客さんに来てもらうためにいろいろなくふうをしているんだなと思いました。わたしは、〇〇くんが～なことを聞いたのを聞いて、〇〇スーパーにお客さんが集まるひみつがさらにわかりました。.....

調べたことをただ書き写すのではなく、タイトルをつけて、2つか3つくらいに分けて書くと、とてもわかりやすいよ。

自分で調べたり、人の話を聞いたりしたことをもとにして考えてみよう。また、友だちと話し合ったり、交流したりしたことも書いてみよう。

まとめられたら、友だちと交流会をしましょう。

図3-17 提示資料：画用紙や模造紙でまとめる具体例



図3-18 具体例を見ながらまとめ、まとめたことを発表する様子

とめることができた。

次に、まとめたことを発表する活動をした。これまでは、なぜみんながA店やB店で買い物をするのかについて、自分の予想ごとに分かれたグループでの追究活動であったので、総合的に調べたり考えたりすることができていなかった。そこで、発表する活動を通して、すべての子どもたちがA店・B店の値段・品物・工夫・サービスについて知ることができ、なぜみんながその二つの店で買い物をするのか、総合的に考えるようにしたいと考えた。

発表は、それぞれのテーマごとにA店・B店の両方行った。グループの発表を聞いた後は、図3-19

のワークシートに聞いたことのメモをとるように指示した。ワークシートは、店の品物の値段、工夫、サービスなどをA店とB店ごとに分けて記録することで、比較しやすいようにした。また、指導者は子どもたちが発表したことを板書でまとめ、後で発表内容を振り返られるようにした。

A店		B店
	ねだん	
	品物	
	工夫	
	サービス	
	その他	

3年 組 名前 ()

なぜ、A店やB店で買い物をする人が多いのだろう。

多くの人が買い物をするわけ

学習をふりかえって

図3-19 比較するためのワークシート

そして最後には、「なぜ、A店やB店で買い物をする人が多いのだろう。」という学習問題を解決するための話し合い活動を行った。

そのための支援として、板書やワークシートのメモを基にして、A店・B店のそれぞれの値段・品物・工夫・サービスを比べるようにした。その際、図3-20のようなカードを活用し、同じところや違うところを見つけワークシートに書いた。そして、書いたことから、なぜ多くの人がその二つの店で買い物をするのかを考えた。



図3-20 比べる視点を示したカードと、学習問題の解決に向けて話し合っている様子

<多くの人が買い物をするわけ> (発言と記述より)

- ・A店やB店は、ねびきやサービスが多いし、それぞれすごくふうをしているから多くの人が買い物をすると思いました。
- ・A店もB店もしんせんものを安く売っているからだと思います。
- ・安くてしんせんで、品ぞろえがいいから、買い物をしやすい。どこに何がおいてあるかわかりやすい。サービスは、その店だけのサービスがあるから。
- ・わりびきやちらしなどをくばって、アピールをしているから、A店にもB店にも来る人が多いと思います。

この時間の最後に、学習を振り返って思ったことや考えたことをワークシートに書いた。

<学習をふりかえって>

- ・また、買い物に行ったときには、もっともっとねだんを見たりしていきたいなと思いました。A店やB店だけじゃなくて、ほかの店もねだんを見たりして、安いか高いかをみたいです。
- ・おたがいろいろな工夫をしていてすごいなと思いました。くわしくしらべて、どちらともお客さんに気持ちよく買い物してもらったり、いろいろサービスも考えたりしているなと思いました。
- ・お店の人はお客さんが買い物しやすいように考えてはたらいっているのだと思いました。お店の人はただはたらいっているだけではなく、お客さんのことも考えていることがわかりました。

これらの記述から、発表を聞いたり、A店とB店の二つを比べて考えたりしたことで、二つの店がそれぞれに販売の工夫をしていることを理解したと考えられる。

その後、A店やB店の野菜や魚はどこから来たかを思い出し、私たちが品物を通して他地域とつながっていることを学習した。単元の最後には、買い物調べで作成した校区の店調べを基にして、校区にあるほかの店について話し合い、この学習を終えた。

(2) 授業から見えてきたこと

2回目の実践では、3人の児童の姿を通して、以下の点で分析を進める。

○資料を読み取る能力の育成

- ・事実を読み取る活動

○言語活動の充実

- ・グループでの話し合い活動
- ・方法を選んでまとめる活動

○問題解決的な学習の過程の充実

- ・学習問題を醸成するための調べ活動

① A児の姿を通して

「出会う」過程

買い物調べでは、学習ハンドブックの具体例を活用しながら、買った店や品物をすべて書き出し、家の人から聞いたことのメモをとることができた。そして、自分がまとめた買い物調べの結果から、次のような気づきをしている。

- ・わたしは、日用品とかはあまりなくて、食料品とかが多いのに気づきました。

A児は、買った品物を一つ一つ数えてその数をノートに書いていた。そして、それらを比べながらどのようなものを多く買っているかを考え、食料品を多く買っていることに気づいていた。

「つかむ」過程

グループでまとめた結果から、次のような思いをもった。また、学習問題の文型を参考にしながら学習問題をつくった。

- ・A店とかB店とかが、いちばん多いからなんでかなと思いました。B店は安くておいしいと、わたしのおばあちゃんが言ってはりました。

<学習問題>

- ・どうしてA店とかB店とかがいちばん多いのだろう。

グループの発表や自分が聞いた話をつなげて考えているのがわかる。そして、「なぜ多いのか」という問題に対して、A店は品物の値段が安いから、B店は安全で値段が安いからという予想をしていた。買い物調べをしたことやグループで話し合い活動をしたことが、問題意識をもつことにつながったと考えられる。

「調べる」過程

店の人にインタビューをしたり、値段を調べたりしながら予想を確かめていた。見学を進める中で、値段だけでなく、品揃えやサービスにかかわることについても情報を収集していた。振り返りの記述からは、多くの人が買い物をするのは、値段の安さだけでなく、他にも要因があることを考えている様子が見えてくる。

「まとめる」過程

A児のグループは、まとめ方の具体例からパンフレットを選んでまとめていた。しかし、記述には品物やサービスについての内容が多く、自分の予想である「値段の安さ」について書かれた内容は少なかった。学習問題の解決に向けての話し合い活動では、多くの人が買い物に来る理由を前頁図3-19のワークシートに次のように書いていた。

- ・A店は、88円とか98円とかの品物が多いから人が買いにくるんだと思います。
- ・B店は、お肉とかが安くておいしいから人がたくさん買いにくるんだと思います。
- ・両方安くていろいろなものを売っているからだと思う。

A児の記述からは、A店、B店の調べた事実を基にして比べ、同じように値段を安くしているということを見つけて、なぜ、A店やB店で買い物をする人が多いのかを考えている様子が見えてくる。

②B児の姿を通して

「出会う」過程

学習ハンドブックの具体例を活用して、毎日継続して家の人の買い物について調べることができていた。また、自分がまとめた買い物調べの結果

から、次のような思いをもった。

- ・いろいろなお店をしらべてみて、A店が一番多くてびっくりしました。他の人もいろんなお店にっているんだなと思いました。

買い物をした店を一つ一つ数えて、「正」の字で表して数え、どの店を一番利用しているかを集計している記述があり、図3-9(p. 23)を参考にしながら調べた事実から考えている様子が見えてくる。

「つかむ」過程

グループでまとめた買い物調べの結果から次のような思いをもった。そして、学習問題の文型を参考にしながら学習問題をつくった。

- ・はんによって、みんないろいろなところにいるんだなと思いました。
- ・気づいたことは、ほとんどのはんの人が、A店かB店に行っているのがわかりました。

<学習問題>

- ・なぜ、行くところがちがって、どうしてその店に行くのだろう。
- ・どうして、B店はいっぱい人がくる工夫をしているのだろう。

A店とB店を多くの人が利用している理由について調べたいと思っているB児の様子が見えてくる。それと同時に、多くの人が多種多様な店を利用しながら買い物をしていることについても関心を示していると考えられる。「商店のはたらき」の実践では、A店とB店に焦点を当てて追究活動をしたが、B児がもったこのような思いは、店側ではなく、消費者側の立場で、店を選ぶ際の工夫について調べることができる学習問題であると思われる。個々が調べた結果を持ち寄ってグループでまとめ、さらにまとめた結果を話し合うことで、多様な思いがもてたのではないかと推察する。

また予想については、A店はいろいろなものを売っているから、B店は新鮮なものを売っているからというものであった。いずれも、自分が聞いたことや経験したことを基に考えているということがノートに記述からわかる。

「調べる」過程

事前の活動では、インタビューの仕方の具体例を活用して、質問する内容や話す順序を考えていた。インタビューの具体例を活用することで、意欲的に店の人や客にインタビューをし、予想を確かめることができたと思われる。また、見学の視点を振り返ったことで、B店に店内放送が流れていることに気づき、「店内放送が流れていることによって明るく元気な感じがする。」とメモをとっていた。

「まとめる」過程

B児のグループは調べたことを画用紙にまとめた。その中で、B児は見学をして思ったことを次のように書きまとめている。

・見学をして、A店とB店を比べて、B店は新鮮で、ねだんは少し高いけど、A店は安いからおたがいくふうしているんだと思う。

記述からは、比較の視点をもって見学をしていると推察される。そして、学習問題の解決に向けた話し合いでは、A店、B店に人々が買い物に来るわけを次のように書いた。

・品物が多いのは、どちらも同じだった。A店の方がねだんが安い。B店は、品物がしんせんで安心できるけど、少しねだんが高い。

記述から、A店、B店の値段や品物を比べ、どちらも品物の数が多いことや、値段や品質が違うことに注目して考えている様子がわかる。

③C児の姿を通して

「出会う」過程

買い物調べでは、学習ハンドブックの具体例を活用しながら、継続して調べることができていた。買った店の名前や品物の値段をすべて書き出し、家の人から聞いたことのメモをとっている。そして、自分がまとめた買い物調べの結果から、次のような思いをもった。

・一週間にC店に2回行ったりするとはじめて知りました。

C店は校区にある低価格のコンビニエンスストアである。C児は、家の人がいっぱいC児と一緒にいるスーパーマーケットだけでなく、他の店でも買い物していることを、買い物調べを通して知ったようである。

「つかむ」過程

グループでまとめた買い物調べの結果から次のような思いをもった。そして、学習問題の文型を参考にしながら学習問題をつくった。

・2はんさんの話は、A店が近いから行くと言って、ぼくもA店までは近いけど、安いからみんなよく行くとわかりました。

<学習問題>

・ほとんどのはんの人がA店やB店に行っているのはなぜだろう。

この記述から、他のグループの発表を基にして考えている様子がわかる。予想は、A店は近くて品物がたくさんあって安いから、B店は食料品や日用品が多いからであった。両店とも品物の種類の豊富さが多くの人々が買い物に来る要因ではないかと考えている。ノートの記述からは、両店に行っ

た経験を基にして考えていると思われる。

「調べる」過程

店の人や買い物に来た人にインタビューをして予想を確かめていた。「近いからいつもA店で買い物をしている。」という話を聞いて納得した様子だった。また、品物の種類を調べたり、並べ方の工夫について聞いたりしていた。

「まとめる」過程

C児のグループは調べたことを新聞にまとめた。自分たちの予想や見学をして確かめた結果は書いているが、品物についての内容が中心で、見学をして思ったことや考えたことについての記述は見られなかった。また、学習問題の解決に向けての話し合い活動では、多くの人々が買い物に来る理由をワークシートに次のように書いていた。

・魚はしんせんで、品物は安くてA店は自転車おきばがあるから。B店は自転車おきばと駐車場があるから。多くの人々が買い物をするんだと思う。

メモには、B店も品物が豊富で、季節によって品物が変わることや値段が安いことを書いていたが、その記述はC児の考えの根拠にはならなかったようである。比較して考えられるような個別の支援が必要だったと考える。

このように3人の児童の姿を分析すると、次のような成果と課題が考えられる。

○資料を読み取る能力の育成

「商店のはたらき」の実践では、買い物調べの結果を表した表やグラフを読み取ったり、見学に行つて必要な情報を集めたりしていた。見学のメモには、値札やポップに書かれている内容や、働く人の服装を観察したことなどが書かれていた。このことから、子どもたちは、学習ハンドブックにあるグラフを読み取る視点や、見学の視点などを活用しながら、多くの情報を取り出すことができたのではないかと考える。

一方で、見学したり発表を聞いたりしたことからは、自分の予想を検証するための事実を選び出すことができない児童の姿も見られた。何が必要で何が必要でないかを見極める力も必要である。

○言語活動の充実

読み取ったことや自分もった気づきや思いを、付箋紙に書いてグループで話し合うことで、「同じ意見が多いな。」「同じものと違うものに分けてみよう。」などの声が聞かれ、気づきや思いが確かなものになったり、整理したりすることができたと思われる。

また、複数のまとめ方の具体例を提示すること

で、それらの中から自分に合った方法を選んでまとめる姿や、調べたことや考えたことを表現する姿が見られた。

しかし、文字にして書き出す際に、自分の気づきや思いを多く書いたり、調べた事実をそのまま書いたりして、何が重要な事柄なのかわからなくなってしまう姿が見られた。子どもたちが簡潔に書きまとめるために、自分が大事だと思うキーワードを使って、短く書きまとめることができるようにするための手だてが必要だったのではないかと考える。

○問題解決的な学習の過程

学習問題をつくるために、買い物調べをしたり、調べた結果をまとめて発表したりする活動をした。「出会う」過程で、活動の時間を十分に確保したことで、子どもたちの問題意識が醸成されたのではないかと思われる。そして、「調べる」「まとめる」過程では、それぞれの具体例を活用しながら学習を進める姿が見られた。

しかし、追究活動を進めるうちに様々な事実に出会い、「～のことについて確かめる。」という自分のめあてを最後までもちきれず、自分がどのようなことを確かめているのかわからないようになる児童の姿もあった。学習過程の中で、常に自分のめあてに立ち返って考える機会や場の設定が必要であった。

このように、授業実践での子どもたちの姿を通して成果や課題が見えてきた。第4章では、本研究で大切にしたいと考えた3つの視点と、その視点を具現化した学習ハンドブックの活用について、成果と課題を分析し、資料を読み取って自分の考えをもつための社会科学習のあり方について述べる。

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の視点について

(1) 資料を読み取る能力の育成

本研究では、資料を読み取る能力を育成するために、資料ごとに読み取る視点を学習ハンドブックに提示した。具体的には、「何を」「どのように」読み取ったらよいか、明確な視点を提示し、その視点に沿って読み取る活動を授業実践で行った。授業実践での子どもたちの姿から次のような効果があったと考えられる。

一つめは、子どもたちから「何だろう。」「～か

な。」という疑問が多く出されたことである。

資料を読み取る視点は、4つの読み取るステップに分けられているが、最初に、見たまま感じたままに資料を見る段階を設けることで、子どもたちの中に「自分がわからないことでもいいんだ。」という安心感が広がり、「これは何だろう。」「もしかして～かな。」という思いをもつことにつながったと考える。「何だろう。」というその思いが、後の追究活動を進める上での学習問題になった児童もいた。それが必ずしも価値のある追究すべき学習問題であったとは言いきれないが、児童が自ら問題を追究するきっかけになったと考える。

二つめは、子どもたちの中に、資料からできるだけ多くのことを見つけようとする意欲的な姿が見られたことである。子どもたちは、一つめに述べた安心感の下、1回目の実践では写真について、2回目の実践では店内の様子について、できるだけ多くの情報を取り出そうと隅々まで見ていた。自分で情報を取り出せる児童はさらに多く、全く取り出せない児童は一つでもというように、視点に沿って読み取ることで自分が読み取った量が増えていくことを実感していた。資料から情報を取り出せることが自分で実感できると、さらに意欲的に活動できると考える。

三つめは、指導者が学習ハンドブックに視点を提示することで、読み取って欲しい内容を子どもたちから出させることができ、後の学習の流れをスムーズに運ぶことができた点である。単元の目標を達成できるような学習問題を、子どもたちが自分でつくれるようにするために、ある程度視点を絞って資料と出会うようにすることが大切だと考える。「資料を見て気づいたことや思ったことを話し合おう。」という活動を通して様々な内容が出され、集約しきれなくなった経験を思い出す。その点で、学習ハンドブックには視点が示されているので、視点を絞った上で学習問題をつくることができ、子どもたちの思いや考えも集約しやすくなると考える。

一方、今後実践を進めるにあたって工夫を必要とする点も明らかになった。

一つめは、取り出した情報をつなげていくような支援をさらに工夫することである。子どもたちが取り出した情報は、それぞれが一つ一つの単独のものである。視点には、それらを自分の経験や体験とつなげたり、友だちの考えとつなげたりして読み取る段階を設定しているが、それだけでは社会とのつながりは意識できない。特に、小学校

3年生の発達段階では、自分と社会とのつながりを広い視野でとらえることは難しいと考える。指導者が、図などに示して視覚的にとらえやすくするような板書やノートを工夫したり、「～ことは～と関係があるね。」「調べたことは～とつながっているね。」などと言葉かけをしたりすることで、自分と社会とのつながりが実感できると考える。

二つめは、読み取る活動を繰り返し行えるように単元計画を工夫することである。どれだけ資料を読み取る視点があっても、資料を読み取る活動を繰り返し行わないと、資料を読み取る力を育成することはできない。

本研究の授業実践では、単元に資料を読み取る学習を位置づけた。3年生の子どもたちにとっては、資料をじっくり読み取るような活動は初めてだった。初めはすぐに読み取ることができなかったが、時間をかけて繰り返し読み取る活動を行うことで、少しずつ情報を取り出せるようになってきた。視点に沿って読み取る活動を常に授業の中に位置づけ、繰り返し行う必要があると考える。また、問題意識をもつための資料の読み取り方と問題を追究しているときの資料の読み取り方は異なってくるので、問題解決的な学習のどの過程でも活用できるように、資料を読み取る視点を改善していく必要があると考える。

三つめは、子どもの興味や関心が高まるような資料提示を工夫することである。ただ教師から資料を提示し、「資料を見て気づいたことや思ったことを話し合おう。」と言っても、子どもたちの側に資料を読み取る必要性が感じられないと、読み取ろうとする意欲は半減してしまう。子どもたちが、「おかしいな。」「どうしてだろう。」と思えるように資料を提示した上で資料を読み取る活動を行うと、資料を読み取ろうとする意欲も高まり、資料を読み取る能力も育成されると考える。

(2) 言語活動の充実

子どもたちが、調べたことや考えたことを表現することは、社会科の学習を充実させる上で大切な要素であると考えた。そのために本研究では、資料を読み取ったり見学したりしたことを、書いたり話し合ったりする活動や、自分で考えをまとめ表現する活動を授業実践に取り入れた。また、まとめ方の具体例を学習ハンドブックに示し、活用するようにした。授業実践での子どもたちの様子から、どのような効果があったのかを分析する。

一つめは、資料を読み取ったり見学したりした

ことを文字にして書き出した内容が考える材料になったことである。書き出した内容はいつでも見ることができるので、振り返りや比較を容易にする。実践授業の中でも、子どもたちに、学習問題をつくる場面や、問題の解決に向けて話し合う場面など、自分や友だちが書いたことを振り返ったり比べたりしながら考える姿が見られた。聞いたことを基に考えることも重要であるが、書いたことを基に考えることの方がより確かな考えをもてるのではないと思われる。

二つめは、文字にして書き出した内容を基に話し合うことで、話し合いの活動がスムーズになった点である。文字にして書いた内容を基に話し合うことで、普段発表することに苦手意識をもっている児童も自信を深めていた。2回目の授業実践では付箋紙を使って話し合った。子どもたちは、指示がなくても、自分たちで付箋紙を動かして同じものを集めたり、残ったものはどのような内容かを一つ一つ見たりしながら、グループとしての考えをまとめていた。友だちの書いた内容を確認し合うことで、みんながどのようなことを考えているのかを共有できたと考える。

三つめは、調べたことや考えたことを主体的にまとめようとする姿が見られたことである。子どもたちは、学習ハンドブックのまとめ方の具体例から方法を選んでまとめていた。初めは具体例どおりにまとめていたが、まとめ方が徐々にわかってくると、そこに自分のアイディアを入れながらまとめる姿が見られた。どのようにしてまとめたらよいのか自分で見通しがもてると、自分でまとめていくことができると考える。そして、調べたことや考えたこと、学習したことなどを自分が選んだ方法でまとめると、次は子どもたちから「いつ発表するの。」「はやく発表したい。」という声が聞かれた。まとめた後は発表するという学習の流れを、子どもたちなりに見通すことができていたのではないと思われる。「自分でまとめることができた。」という思いがもてると、次の意欲が出てくるのではないだろうか。

しかし、これらの姿は、意識的に書いたり話したりする活動やまとめる活動を学習過程の中に位置づけていたからであり、子どもたち自らが、書いたり話したりまとめたりしながら学習を進めていくという姿をめざすためには、いくつかの課題が残った。

まず、書いたり話したりする活動を繰り返し行うことが必要となってくる。書く→話す→聞く

いう一連の活動を子どもたちの意識の中に位置づけられるように、書いたり話したりする機会と場を授業の中に設定していく必要がある。

次に、「何を」「どのように書けばよいか」ということを学習ハンドブックの中にも具体的に示したが、実際の授業場面では、事実を多く書いたり、自分の考えを長く書いたりする児童の姿も見られた。学習問題を解決するためには、どのような言葉が重要となってくるのか、自分でキーワードを探して、それを使いながら短く書きまとめられるようにすることも、今後求められる能力の一つである。

（3）問題解決的な学習の過程

学習ハンドブックに、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」の過程に沿って学習の進め方を示し、問題解決的な学習の過程に沿って単元計画を作成し授業実践を行った。それが子どもたちにとって、学習の仕方を身につけ、自ら問題を解決することにつながったのかを、それぞれの過程ごとに振り返る。

「出会う」過程

資料を読み取る視点を提示することで、子どもたちは資料から社会的事実・事象を読み取ろうとしていた。資料から、追究する問題をつくるための気づきや思い、疑問をもつことができたと考えられる。

「つかむ」過程

出会う場面でもった気づきや思いや疑問を追究する問題にしたいと考え、学習問題をつくる流れや学習問題の文型を学習ハンドブックに提示し活用した。

これらの活動は、どのようなめあてをもって調べていけばよいかのわからない児童や、学習問題をつくることができない児童にとっては、有効な支援であったと考える。それは、「『なぜ～だろう』という文にすればいいんだ。」ということに気づかせることができたからである。経験則であるが、「調べたいことを書きましょう。」と指示をして、「何を調べたらよいかのわからない。」「何を書いたらいいのかのわからない。」と話す児童がいた。学習問題をつくる場面でも、段階に分けて目標設定をすることが重要であると考えられる。

しかし、「出会う」過程で、「なぜ～だろう。」とすでに追究する問題がつくれている児童にとっては、このような活動は必要がなかったように思われる。特に2回目の実践では、「なぜ、A店やB店

で買い物をする人が多いのだろう。」と書いている児童が、再び「なぜ～だろう。」という形にすることで、戸惑っている様子が見られた。

このようなことから、「つかむ」過程では、すでに自分なりの問題がつくれている児童に対して、さらに「調べてみたい。」という意識をもたせるために、一人一人の児童に応じた支援がさらに必要であったと考える。「調べてみたい」という意欲をもたせるために、子どもたちにとって意外性のある教材を提示したり、既有的の見方や考え方を揺さぶったりするような出会わせ方をする必要がある。

「調べる」過程

特に1回目の実践では、いくつかの調べる方法を学習ハンドブックに提示したが、自分の問題を解決する資料がなかなか見つからず、複数の方法で調べるうちに意欲が低下する様子が見られた。あらかじめ、問題を解決するための資料を集めて、活用しやすいように資料集にまとめるような支援も必要だったと感じる。2回目の実践では、インタビューの仕方の具体例やメモの取り方の具体例などを活用しながら見学の準備をしておくことで、見学に行っても臆することなく質問することができた。子どもたちが、多様な方法での調べ学習を積み重ねることで、問題解決の仕方を身につけていくことができると考える。

「まとめる」過程

1回目の授業実践では、全員が白地図でまとめたが、2回目の実践では、いくつかのまとめ方の具体例を学習ハンドブックに提示し、その中から方法を選んでまとめるようにした。他の方法で示しているかきまとめ方なども取り入れながら、工夫してまとめる姿が見られた。

2回の授業実践を通して、子どもたちの姿から、成果として考えられるのは、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」という一連の流れが少しずつ意識できるようになったことである。特に「調べる」「まとめる」の流れは、子どもたちの中に意識づけられていたように思われる。自分の問題に沿って調べた後、「次はまとめる活動だ。」という声が聞かれていたことからもうかがえる。

一方で、「出会う」「つかむ」過程で、いかに「調べたい」という思いをもたせるかが重要であることもあらためて感じた。形では学習問題をつくることができたが、その学習問題に「どうしても調べたい。」という思いが入っていたかという点、少し疑問が残る。「どうしても調べたい。」という思

いがつまった学習問題がもてると、調べ方やまとめ方を参考にしながら、主体的に学習を進めることができると思う。

第2節 学習ハンドブックの可能性

(1) 学習ハンドブックの効果

授業実践での子どもたちの姿から、学習ハンドブックを活用することで次のような効果があったと考える。

一つめは、活動の目標がもてたことである。「まとめる」過程において顕著であったが、学習ハンドブックを活用することで、子どもたちに「このように書けばいいんだ。」という活動の出口を見通すことができた。出口と今の自分の学習状況を比べて、今何をしなければならないかということがわかり、目標をめざし活動する姿が見られた。社会科が苦手だと感じている児童も学習ハンドブックを参考にしながら学習していた。

二つめは、学習を進める中で、困ったときに振り返ることができたことである。自らの問題を追究する問題解決的な学習では、すぐに自分の問題が解決できるとは限らないし、たとえ解決できたとしても、いくつかの方法で多面的に事実を見つめることが求められる。その追究の過程で立ち止まったときには、学習ハンドブックを見て、もう一度学習の進め方を振り返ったり、他の方法を選んだりしながら、学習を進めることができる。言い換えれば、児童が立ち止まったときに、どのように学習してきたのか、学習の進め方を自分で振り返れるようにすることが重要だと考える。

三つめは、支援が必要な児童に、指導者が重点的に支援を行えるようになったことである。学習ハンドブックを活用して学習を進められる児童にとっては、自分で学習を進めることができた。その分指導者は、支援が必要な児童に重点的にかかわることができた。特に、「まとめる」過程では、「どのようにまとめたらいいいのか。」「何を書いたらいいのか。」などの質問はほとんどなく、指導者は、支援が必要な児童にかかわることができた。

(2) より効果的に活用するために

社会科の学習と出会って間もない3年生の児童にとって、社会科の学習の進め方を具体的に理解させることは、主体的に学習を進めることにつながると思う。授業実践では、学級全体で学習ハンドブックの具体例の一つ一つを読んだり、指導

者が内容を説明したりしながら学習を進めた。初めの段階で丁寧に指導することで、学習ハンドブックに書かれている内容や学習の進め方を少しずつ理解していった。そして、学習の進め方が理解できると、主体的に活動する姿が見られるようになった。「商店のはたらき」の実践で、結果を持ち寄ってみんなでまとめる前に、家庭学習で買い物調べの結果をグラフにまとめた児童がいた。尋ねてみると、学習ハンドブックを見ながら自分でまとめたと話していた。このような姿から、学習の進め方がわかるようになると、どんどん自分で学習を進めることができるのではないかと考える。そのためには、学習ハンドブックを、すべての児童にとって使いやすいものにしていきたいと考える。

授業実践では、学習ハンドブックに「自分で予想してみよう。」「友だちと同じところやちがうところを見つけよう。」など、自分の考えをもったり深めたりするための活動例を書き入れたが、結果的に文字が多くなってしまったために抵抗感もち、活動例の一つ一つを読み込むことができていない児童がいた。今後、学習ハンドブックに示す内容を見るだけで、「こんなふうになればいいんだ。」と見通しをもつことができるような内容に改善していく必要があると考える。

さらには、学習ハンドブックを活用しながら社会科で身につけた技能が他教科においても生かされるようにしたいと考える。また、他教科で培った技能を社会科の学習で生かせるようにしたいとも考える。例えば、図書資料を使って調べたり、調べたことや考えたことをかきまとめたりする力は、国語科においても発揮されるであろうし、それとは反対に、国語科で身につけた力が社会科においても発揮されるのである。また、算数科や理科の学習においても、問題を把握する力や、様々な考え方や方法で問題を解決する力が求められる。社会科の学習だけではなく、学習ハンドブックをより多くの学習場面で活用できるようにするために、学習ハンドブックに提示している問題を見出したり調べたりまとめたりする具体例の内容をより充実させていきたいと考える。

おわりに

最後に、京都市立朱雀第四小学校の研究協力員の先生方をはじめ、教職員の皆様に支えられ本研究を進めることができた。この場を借りて感謝の意を表したい。